

---

# 僕が望む全て

桜真理恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕が望む全て

### 【Nコード】

N7554X

### 【作者名】

桜真理恵

### 【あらすじ】

公爵家の長男・コーネリアスには、恋してやまない許嫁・セシリアと結婚できない理由があった。

全7章の予定です。近世イギリスを舞台にした、ファンタジー設定を含む恋愛小説です。

※改行少なめ、文字多めです。気をつけてはおりますが、携帯からは読みにくいかもしれません。

## 1 (前書き)

近世のイギリスを舞台にしています。  
妙なところがありましたら申し訳ありません。＜＜。

彼女はおよそ『淑女』とは言えない少女だったと思い出す。……  
少なくとも、自分の前では。

屋敷の南側にある自分の居間の大きな窓。今も屋敷内に住む乳母が見たら、自分が教えていたことは無駄だったのかと嘆かれること請け合いの格好で窓枠に座る。開け放たれた大きな窓、その窓枠に腰掛け、脚を組む。銀色に煌めく黄金色の美しい瞳を、何処を見るわけでもなく、遠い空気に向けている。結ばずにおいた漆黒の髪を、暖かな風が優しく絡め取ろうとしていく。

頬を撫でる緩やかな空気。……ここに吹く風は何故ロンドンと似ても似つかないのだろう。

久しぶりに領地に舞い戻り、『彼女』はすれ違いにロンドンへ行っていると言われ、今度はそちらに意識が流れてゆく。同じ空気、同じ風。なのに、行く先々で違ったものに感じるのは、気候の所為だけではない気がする。

そういえばセシリアが言っていた、何処に行こうとも、自分が幸せだと思える時間を過ごした場所にいちばん素敵な風が吹く、と。それはきつと、この屋敷のことだ……。彼は結論づけた。もしくは……。

ふわりと風が甘い薫りを運んでくる。花の香りだろうか。……何という名の花だろう。彼女が居れば教えてもらえるのだが。

そこで気付く。続けて苦い笑みが口元に浮かぶ。ロンドンでは浮き名を流す自分が、身の周りで起こることを思う時、全て彼女に帰結するのはどうしたことか。手を髪にやり、すつとかき上げる。柔らかな眼差しで、彼女の屋敷の方角をなんとは無しに眺めた。

折角帰ってきたのに、ここに居ないなんて。ロンドンに居るのなら、知らせてくれれば、彼女の用が済むのを待って、一緒に帰って

来ただろうに。何の為に、馬を何度も変えて、休みも取らずに帰ってきたのか……。

そこでまた新しい事実気付く。そうか、僕は彼女に逢えると思って、あんなに急いで帰ってきたのだ。また笑みが浮かんだが、今度の笑みは優しかった。しかし、その瞳は暗い憂いを宿している。

「仕方のない奴だな、コーネリアス・バートランド。」

自分で叱咤してみる。

今度の帰宅は、そのセーリアとの婚約を破棄する為なのに。婚約といってもお披露目もしていないし、本人同士にその気がないと納得させれば解消できるだろう。ただ……自分以外の全員が二人の結婚を期待しているだけだ。

自分以外の全員。

自分「以外」だと？

コーネリアスは苦笑を漏らした。

コーネリアス・バートランドは、シアリーズ公爵家の長男である。シアリーズ公爵家は何代か遡れば王弟にたどり着くという由緒正しい公爵家であり、祖父にあたる先代の公爵が起こした事業も、小さいながらも成功している。

祖父から父へと引き継がれた事業は、現在ではコーネリアスが動かしている。今のところ、成功していると自負しているが、父もそれを認めてくれているのかも知れない。コーネリアスが育った屋敷とは別の場所に、継母と共に新しい居を構えて何年にもなる父が、お前もそろそろ身を固めろと煩く言ってくる。今までは、学業や仕事に忙しいからと先延ばしにしていた。

ところが、この冬に父が倒れ、容態は芳しくないと継母のレイチエルが言ってよこした。

「少しでも早く結婚してくれないかしら、コーネリアス。死ぬ前に孫の顔が見たいと仰るのよ。」

先月、見舞いに行ったら、とうとう最終宣告とも言える台詞を聞

かされた。勿論その言葉は、セシーリアとの結婚を示していたのだろう。

レイチェルと父が再婚したのは彼が13になる年だった。もう10年も前の話だ。実の母はさる貴族の令嬢だったが、駆け落ち同然で父の元に嫁いで来た為、家族とは疎遠になっていたと聞いている。その母は彼が幼い頃に病で亡くなってしまった。

自分の生母のことを知らなければ、と思う前にも、不思議に思ったことはあった。公爵家に嫁ぐのに何故駆け落ちなのか、と。

傲慢な言い方ではあるが、爵位があると言うだけで魅力を感じる人間は多い。そして称号を鼻にかけるような輩も数多い。大抵の親は喜んで娘を嫁がせてくるものだ。

……それが何故？ 答えは簡単だ、どちらかの家族が反対した為だろう。

ではどちらの家族なのか？ その答えは分からない。或いは両方かも知れない。しかしコーネリアスの父が束ねるシアリーズ公爵家に関して言うならば、数え切れない親戚たちは欲深な人間が多い。とは言っても、シアリーズ公爵はその最高位にある。親戚たちの反対など、簡単に押し切れる筈である。

父の母であるコーネリアスの祖母は傲慢ではあるが人格者だ。更に彼女はロマンスを深く信仰している。祖母自身が、祖父に一目惚れされるという壮大なロマンスを経験している。父がこの人だと言ったなら、例えそれが何の身分もない、例えば粉屋の娘でも、喜んで受け入れるのではないだろうか。

シアリーズ公爵家は地所からの収益や、事業のおかげで財産に困っているわけでもなく、嫁いでくる女性の持参金はあてにせずに済む。加えて祖母は社交界での地位や評判などはあまり気にしない、変わり者だと言われる類の女性だった。ということは、生母の家族が反対していたことになる。

後に、彼が母について尋ねて回った時、皆が口を揃えて言うことは、如何に両親が愛し合っていたかということや、如何に素晴らし

い女性だったかということ、母方の家族については誰も知らなかった。……口を閉ざしているのか、本当に知らないのか……。

彼はそれ以上、誰にも訊かなかった。レイチェルの手前もあったし、知るのが怖いというのもあった。コーネリアスは今でも生母については多くを知らず、生母の出身に関しては全く知らないままであった。

母を亡くした後、妻を溺愛していた父の嘆き様は凄まじく、何年も再婚の勧めを断ってばかりいた。跡を継ぐべき息子が一人しか居ないのはシアリーズ公爵家全体の問題だと、親戚が一様に抗議したが、一人居れば充分だと父はすげなく言っただけで語らなっている。夫婦の両方に愛人が居るのが当たり前だと言われる当世にあって、父のそんな態度は珍しく、領地に住む人々にはとても好意的に写ったらしい。

それはそうだろう、とコーネリアスは思っている。誰だって自分たちが納めている税を愛人に注ぎ込むような領主など、お断りなのだから。

父がレイチェルと再婚したいきさつには、息子であるコーネリアスも多大に関わっていた。レイチェルは素晴らしい女性だった。父を心から愛してくれる。

少々荒療治ではあったが、コーネリアス少年は祖母、レディ・イザベラを巻き込んで策を弄し、更には領地内の人々の手を借りて、それを成功させたのだった。そのお影とは言わないが、父も素晴らしく幸せに暮らしている。

……冬に倒れるまでは。

あんなに幸せそうにしていたレイチェルも、青い顔をしていた。彼が見舞いに行くと、ずっと実の息子のように接してくれていたレイチェルも多少は色を戻したが、不安を口にするうちに、頭に血が上ったらしく、赤い顔をして、彼に断って席を立てってしまった。こ

れはいよいよ困ったことになったらしい。コーネリアスは実は、途方に暮れていたのだった。

自分の心に、僅かに残った夢を、この手で握りつぶさなければならぬ。

そしてその瞬間はもう、先延ばしには出来ないらしい……。



## 1 (後書き)

長いお話の幕開けです。  
書き溜めはあるのですが、更新はゆっくりになると思います。

セシーリアは領地の境界を接する、名だたる名家、フェザーランド家の一人娘である。コーネリアスとセシーリアの父親同士は幼なじみであり、無二の親友であった。

フェザーランド夫妻には、バートランド家のような壮大なロマンスは訪れなかったが、夫婦仲は良く、フェザーランド卿は気弱な妻を気遣ってか、夫人への愛のためか、愛人も居ないという話である。また、フェザーランド家の女主人は病気がちで、触れれば折れてしまいそうな雰囲気の人である。セシーリアを授かったのも奇跡だと言われた程であり、フェザーランド家には後を継ぐべき子どもがセシーリアしかない。

長年、親しく行き来していた二つの家で、一人息子と一人娘の将来を期待するのは自然なことなのかも知れない。幼い頃から、ことあるごとに「セシーリアを大事にするんだぞ」とか「娘を幸せにしてやってくれ」とか、振り返れば二人の結婚を前提としているような言葉をかけられていた。

爽やかな風を浴び、窓辺に座ったまま居間を振り返ると、壁にくっつかの小さな肖像画がかかっているのが目に入る。その中の一枚の肖像を眺める。その絵はとても精巧に描かれていた。昔ながらのイギリスの花がごとく、金糸の様なブロンド。薔薇色に染まった、透き通るような白い肌。5、6歳の頃のセシーリアが、きらきらとこちらに微笑みかけていた。

コーネリアスは、彼女の髪が、日に透けると赤味を加えたようなストロベリーブロンド、月光の下では月明かりをそのまま髪にしたようなプラチナブロンドに見えることを知っていた。

そしてセシーリアは不思議な瞳の色の持ち主だった。

コーネリアスは彼女と初めて言葉を交わした時のことを思い返し

ていた。

そう、彼女はとてもお転婆で、弾けるように笑う、陽光の塊のような少女だった。

最初に彼女に逢ったのは彼女が生まれて間もない時だったらしい。ということは、コーネリアスは6歳になる直前だと思われる。しかし彼自身はそのことを覚えていない。フェザーランド卿は父の無二の親友だったし、父にとって何の気兼ねも要らない数少ない友人の一人であり、妻を亡くした悲しみに浸っていた父を心配してよく訪ねてくれた恩人だった。

自然、フェザーランド夫人もよく伴われており、彼らが家にいることは多かったのである。が、フェザーランド夫人は出産後、滅多に外出しなくなった。もとより家の中で静かに過ごすのが好きな彼女は、娘と共に留守の番をする方を好んだ。

それによって、コーネリアスが未来の妻と期待されている少女と、それと知らずに出逢ったのは、父に伴われて産後のお祝いに行った時が初め、そしてフェザーランド卿が流行病で寝込んでしまった見舞いに行った時が二度目だった。

コーネリアスはフェザーランド卿をとて慕っていて、どうしても部屋まで見舞うと言って聞かなかったが、流行病は感染するからと、寝室に入れてもらえなかった。そこでふてくされて庭の散策に出かけたコーネリアスは、庭のはずれで声もなく泣き崩れている少女を見つけた。

大きな樹が密集した庭のはずれ。小さな少女が、消えてしまおうというように小さく、丸く蹲っていた。

それまでも、コーネリアスには沢山の友人が居たし、小さな女の子も沢山知っていた。

けれど彼は泣きじゃくっている女の子の扱い方など知らなかった。見なかったことにして屋敷の反対側の庭に行こうかとも思ったが、

どうしてもその場を動けず、少女を見守っていた。

僕よりかなり年下の様だ。小さな女の子を相手に、何故石のように固まってるんだ？

そう思ったが、声を殺して肩を振るわせる、そのあまりに哀しい泣き方に近寄ることはおろか、声をかけることも出来ないでいた。

一頻り涙をこぼし、彼の見守る前で涙を拭った彼女は、ゆっくりと振り向いた。

コーネリアスは息が止まるかと思った。少女の瞳は新しい涙が留まり、影を作った大きな樹を背にして、その瞳だけが細かく揺れる輝きを放っている。目の前に居るのはまだ小さな少女なのに、彼はこれほど美しい光景を見たことがないと思った。

「だあれ？」

まだしゃくりあげながら、驚きもせず少女が訪ねる。そこで初めてコーネリアスは動けるようになった。黙って彼女の側まで歩いていき、その小さな手を取り、それまで木陰で隠れるようにしていた少女を、陽の光の中に連れ出す。

そのまま木陰においておくと、闇に捕らわれて連れ去られてしまうのではないかと恐怖に似た思いが胸をよぎったのだ。

夏の日光のもとで、そのカールしたストロベリーブロン드가きらきらと輝く。その輝きに目を奪われながら、俯いている少女に声をかけた。

「君はだれ？ここはフェザーランド卿のお庭だよ。……何故泣いているの？」

コーネリアスの口から飛び出す早口の質問に、少女は俯いたまま、しばらく何も言わなかった。

怖がっているのかと思ったが、俯いた少女の後頭部に心配げな眼差しを投げかけているうちに、彼女が涙を押し戻そうと苦戦しているのだと気付いた。呼吸さえ押し殺している様だ。自分の身の、胸にさえ届かない小さな身体を震わせながら必死に俯く少女に、何故だか胸が痛んだ。無力な自分にできることを懸命に探したが、見知

らぬ少女相手に、どうして良いのか、皆目見当がつかない。

少女の小さな手を捉えていた自分の両手を、彼女の頭と背にやる。腹のあたりが濡れていくのを感じる。そのまま軽く抱きしめてその震えが去るのを待った。時折背中をさすり、頭を撫でた。今思えば、自分が知っていた唯一の慰め方だったのだと思う。母を思っ泣いた夜に乳母や父が、同じやり方で慰めてくれたことを思い出したのは、そのずっと後だった。

## 2 (後書き)

増やしたつもりなのですが、まだ改行が少ないでしょうか……・ω・、

### 3 (前書き)

小さなセーリアとの思い出は続きます。

しばらくそのままで居ると、肩を大きく震わせた少女が、絞り出すようにつぶやいた。息と鳴咽の合間に少しずつ言葉らしきものが発せられる。

『とうさまが死んじゃったらどうしよう』。とぎれとぎれの言葉をつなげると、彼女が言ったのはそういうことらしい。

よく訪ねてくるフェザーランド卿が、可愛くて仕方のない愛娘の話を頻繁にするのでコーネリアスは『セシーリア』の名前を知っていた。ではこの少女がフェザーランド卿の令嬢なのか。

蹲って泣いていた少女は、聞いていた年齢よりも幼く見えた。新しい目で少女の髪を見下ろす。

そういえば、フェザーランド卿はブロンドだったっけ……。

本人の嘆きを無視して後退してしまっている髪は、確かに薄い金色だった。コーネリアスと同じ漆黒の髪をふさふささせている父に、フェザーランド卿はよく自分の広すぎる額をネタに笑っていた。これでも昔は美男子で通っていたのになあ、と。君の父上と僕は、ご婦人方にとっても評判が良かったんだよ、コーネリアス。そうは見えないかも知れないけれどね。

彼はとても陽気な話し相手だった。

セシーリアにとれば最愛の父。不安で仕方がないのも無理の無からぬことだろう。フェザーランド夫人はその体の弱さ故、他の誰よりも、流行病から離しておかなければならない、と、フェザーランド卿の意向で、コーネリアスの祖母、イザベラの屋敷に滞在している。セシーリアは母と共に祖母の屋敷に行ったと聞いていたのに。

「きつと大丈夫だよ。」

コーネリアスは優しく声をかけた。フェザーランド家の屋敷では使用人が落ち着きをなくし、父でさえ青い顔をしていたのを、彼は言わずにおいた。気休めだとは思ったが、それでも彼女を泣かせて



おいて、その場に佇んでいたくはなかった。……なんとしても。

そのまま兄のように抱きしめていると、少女の肩が次第に落ち着いてきた。コーネリアスは同時に自分の心も落ち着いていくのを感じていた。少女がやっと話出す頃には、安堵に近い気持ちになっていた。

掠れた鼻声で少女は言った。顔をコーネリアスの服に埋めたまま、やはりどこどこでつかえながら。

「あたし、セシーリア。」

コーネリアスは、知っている、と言いかけて止めた。代わりに言ってみる。

「まつげ（シリア）？」

案の定少女は怒って言った。

「セシーリア！」

「よろしく、まつげちゃん（ミス・シリア）。」

嘆きが怒りに代わっただけで、彼は高揚した気持ちになっていた。

「セシーリアだってば！！」

怒った彼女はぱっと顔を上げた。

目が合う。

その瞳とぶつかって、言い返そうとしていた言葉を忘れた。

視界いっぱい彼女の目が見えているような気がしていた。頭の中は真っ白で、その両目しか見えない。僕は誰で彼女は誰なのか……

……？ 自分の心臓を射抜かれた気さえた。

グリーンとブルーの瞳。

木陰で見たときはブルーだと思った。けれど陽の光で間近に見ると、それは左右違う色の瞳だった。驚嘆する。……心臓が肋骨を突き破るくらいに。……そうだ、これは驚嘆だ。そうに決まってる。

目をそらすことが出来なくなった。コーネリアスから向かって左側の瞳は砕けたガラスのような深い勿忘草の色。いや、ブルーのダイヤモンドかも知れない。僕は見たことないけど。

右側の目は形容しがたく美しいブルーグリーンの瞳だった。空の色でもなく、木の葉の色でもなく……この色は何て言うんだろう……？ レイチエルがいつも付けているエメラルドより、柔らかく、そして青い。

そこまで考えたが、彼女にからかいの言葉を返した。

「わかってるよ、まつげちゃん。」

幸いなことに、かなり経っていると思った驚愕の時間は、彼女が瞬きする一瞬だけだったらしい。頬を染めて、彼女は切り返した。

「あなたってとびきりイヤなひとね!!」

良かった、彼女は激怒しているらしい。その不思議に美しい瞳に、悲しみの断片が残っていないことを確かめながら、コーネリアスは言った。

「コーネリアスだよ。」

彼女はきらきら光る瞳をコーネリアスに向けたまま、ぼんやりと言った。彼女の思考が、父親に戻っていくのが分かった。

「こんにちは、コニー。」

霞がかったような瞳に涙が戻るのを恐れて、コーネリアスは慌てて言った。

「コーネリアスって呼んでよ。」

少女がきょとんとしてコーネリアスを見上げる。その目に自分が映っていることに、妙な満足感を覚えた。

「なぜコニーじゃだめなの？」

別に駄目じゃない。不思議そうに見つめられて、更に慌てて言葉を探す。乳母や庭師たちはいつも僕を『コニー坊ちゃん』と呼ぶ。

……でも駄目なことにしなきゃ。

ふん、と鼻を鳴らしてから、鼻にしわを寄せた。

「『コニー』じゃまるで赤ちゃんだろ？」

一瞬間をおいて、セシーリアが弾けるように笑った。音が弾んでいるように聞こえた。……きらきらと。笑っている。今度こそコー

ネリアスは心からほっとした。自分の顔が幸せそうに微笑んでいることには気付いていなかった。

彼女が笑い終える前に、彼は声をかけた。

「君の瞳って、片方ずつ違うんだね。」

その問いかけに彼女は誇らしげに応えた。

「そうよ、『オッド・アイ』っていうの。……かあさまが教えてくれたのよ。」

コーネリアスを通り越して屋敷を見た少女は、微笑みを消して言った。

「とうさまが、とても珍しい、素敵な瞳だって。」

コーネリアスは舌をかみ切りたくなった。

外見の話なんて、両親に繋がるに決まってるじゃないか！

「『奇妙な目』？」

瞳に無邪気さをみなぎらせ——るように努力して——、からかい続けることにしたコーネリアスは言った。『odd』<sup>オッド</sup>という単語の意味のひとつは『奇妙な』。明らかに気分を害したらしい小さな女の子は肩を怒らせて言った。

「『片方の目』よ！」

勿論『片方の』という意味もある。彼の腕から逃れて、続ける。

「もおっ！あなたさっきから、わざとあたしをからかっているの？！」

怒りが冷めなさそうなのに少し安心して、彼は軽く言い返した。

「ごめん、まつげちゃん。初めて見たものだから。」

涼しい顔で言っただけ。セシーリアは美しい髪を逆立てそうな勢いで怒っていた。

「さよなら、ミスター・コニー——！」

言い残してぷりぷりしながら屋敷の方に向かっていく。彼女が、暫くは涙を浮かべたりしないであろうことが嬉しくて、コーネリアスは笑った。……腹の底から。

笑い声が耳に届いたらしいセシーリアは、ちらりとコーネリアスを一瞥し、

「レディに向かって失礼しちゃわー!!」  
とぶつぶつ言いながら、屋敷に戻っていった。およそレディらしからぬ足取りで。

——それが彼女と最初に言葉を交わした時のこと。

### **3 (後書き)**

とりあえず、今日の更新はここまでです。  
あと1話分で第1章が終了する予定です。

……「ミスター・コニー」。

思い出しても頬がほころぶ。

彼女が屋敷に入って、姿が見えなくなってからも、コーネリアスの心は弾んでいた。泣いていた小さな淑女を笑わせたことが嬉しくて。……正しくは『怒らせた』のだが、泣きやませたことに変わりはない。

あれから12年経った。

あの時、11歳だった無邪気な少年は、あの後……。

いや、考えるのはよそう。

泣いていたセシーリアに出逢った日から、フェザーランド卿の容態は、ベッドから出られないまでも、だんだん落ちついていった。コーネリアスは毎日のように父と見舞いに行き、当然、セシーリアにも頻繁に逢った。

フェザーランド卿によって最初に紹介された時には、まだ敵意がむき出しだった小さなセシーリアは、次第にコーネリアスを仲間と認めたようだった。

仲間だと認めて貰うまでに、コーネリアスが彼女に捧げたいたちの数々は常に、気の毒な虫やカエルによる安全地帯への避難と、彼らに対するセシーリアの悲鳴で締めくくられていた。セシーリアは動物が大好きだったが、虫と爬虫類は、その範疇外だということをコーネリアスは知っていた。

コーネリアスの誤算は、小さな女の子が、必ず仕返しを編み出さずにはいられないという習性を持ち合わせていたことだった。コーネリアスのベッドの真ん中に、黄色い花びらを絞った水で大きな染みを作ったり、コーネリアスのお気に入りクッションを飼い犬に差し入れたり、来客に挨拶するコーネリアスの髪に、こっそりリボ

ンを飾ったり。多くの場合、セシーリアの仕返しは大成功を納めた。

しばらく互いにいたずら合戦を繰り返していたが、ある日、二人は一緒に何か大きないたずらを仕掛ける方が面白そうだということに気付いた。そういうわけで、彼らは大いなるいたずらの為に協定を結び、互いを標的にするのを控えることにしたのだった。

かなり年上であるコーネリアスにセシーリアは全く距離を感じないらしく、引け目を感じるどころか、寧ろ率先していたずらを考え出し、実行した。

庭師が用意した、完璧に並べられ、植え替えるのを待つだけだった花々の鉢をめちゃくちゃに並べ替えもしたし、メイド達が運んでいた洗濯前のカーテンと、洗濯後のカーテンの置き位置をこっそり入れ替えもした。洗い立てのカーペットに足跡を付けるのは勿論、来客のために並べられた皿に、砂で絵を描いたりもした。子どもだけでは絶対に行ってはいけないと言われていた、領地の北の境界にある森にも行ったし、同じく子どもだけでは絶対に乗ってはいけないと言われた大きな暴れ馬にも乗った。

擦り傷は嫌になるほど作ったが、幸いなことに大きな怪我もなかった。散々怒られたりもしたが、二つの屋敷の人々にとって非常に残念なことに、二人は全くへこたれなかった。寧ろ、どんどんいたずらが巧妙になっていくという「成長」が見られる始末である。

フェザーランド卿が床に伏し、暗くなりがちだったフェザーランドの屋敷内は、暗い気持ちになる間もなく二人の悪魔に手を焼いていた。

一緒に遊べて、よく気が合う妹のような存在に、コーネリアスは浮き立っていた。彼女はコーネリアスの提案をすぐに理解する上に、更に「面白い」アイデアを、こんこんと湧き出す水源のように、もたらす少女だった。同じものを見ることができる存在、そして時には守るべき存在が出来たことを、彼は純粹に喜んでいた。

セシーリアが考えを巡らせるときの仕草や表情は、視線を逸らす

このできない何かがあるようだ、と幼い自分が不思議に穏やかな気持ちで考えていたことを、コーネリアスは今でも覚えている。あの大きな馬に二人で飛び乗ったときに、彼女の小さな手が、驚くほどの力で自分の体に回されていたことも覚えている。大人の目を盗んで馬に乗ることを提案したのはコーネリアスだったが、小さなセシーリアを危険に晒したことに気付いた瞬間、その提案を心から後悔したのだった。

思い出すと、面映ゆい。小さな彼は、まだその気持ちを何と呼ぶか知らなかったが、確かにその気持ちを知っていた。

二人の両親達は、子ども達が仲良くなっていくのを見ながら、更に将来について期待を膨らませたのだろうと今になって思う。後にレイチェルを加えた4人は、本当に喜んでいたと聞く。けれどそんなことを知らされていないセシーリアとコーネリアスは無邪気に、本当に無邪気に友情を育んでいた。

セシーリアと一番長く共に過ごしたあの夏は、コーネリアスの記憶に木漏れ日と野の風の匂いを残している。

あれだけ仲の良かったセシーリアと、思春期以降は、実は殆ど逢ってはいいない。

彼には寄宿学校があったし、大学にも行った。現在は卒業してしばらく経つが、その間ずっとロンドンに居り、長期休暇にも滅多に帰らなかった。

帰って来たくなかった、というのが一番正しいのかも知れない。それを知ってか知らずか、すっかり快復したフェザーランド卿は、屋敷に戻ると必ずシアリーズ公爵一家を招いた。何年かに一度、屋敷に帰ると、帰ってきた放蕩息子のように迎えられた。帰っても、セシーリアが居ないこともあったが、両親達は子ども達が手紙をやりとりしているのを何故か知っていて、将来を夢見ていたのだろう。



今ではロンドンの屋敷を拠点とし、父から引き継いだ仕事もロンドンでこなしていて、帰れない理由は山とあった。

セシーリアに逢うのが怖かった。

それが一番の理由だと、彼は自覚していた。

交わした手紙は、今や本棚の引き出しを二つも占めているが、彼が『そのこと』を自覚してからは、両手の指に収まるほどしか逢わなかった。コーネリアスが寄宿学校に入るまで、二人は毎日のように一緒にいた。寄宿学校に入ってから、最初の頃は長期休暇で帰省するたびに、それまでと同じように二人でいたずらを企て、喧嘩し、笑った。

けれど、自分の身に起こっていることに気付き始めたコーネリアス少年は極力、親しい人々を避けるようになった。大切に想う人達を。……守るべき人達を。

今、ロンドンでのコーネリアスは、社交界で噂になるほど、浮き名を流している。彼はその必要にかられていた。数々の美女達と交際し、共に夜を過ごした。……コーネリアス自身は、相手を慎重に選んでいたにしても、彼と噂になった女性は数多い。噂の全てが真実ではなかったが、中には真実も含まれていた。

コーネリアスの穏やかな物腰と、不思議な存在感、それに自然と漂う色香は、無視するには魅力的すぎるのだろう、というのは寄宿学校時代からの親友の言葉である。親友であるネイサンによると、「女性の方が放っておかないタイプ」なのだそうだ。

……それなのに。

コーネリアスは苦い色を浮かべた視線を、幼いセシーリアの肖像画から引きはがし、遠く、肖像画が描かれた頃のセシーリアと探検に出かけた森の方へさまよわせた。

そう、彼は愛する家族と暮らすことは出来ない。

なぜなら彼が渴望しているのは、人の血液なのだから――……。。

## 4 (後書き)

やっとファンタジー設定を引っ張り出してきました $\geq \equiv \nabla \leq$   
第一章はここでおしまいです。次のお話は第二章になります。

僕は化け物だ——……。

初めて自分が渴望している物が何であったかを自覚したコーネリアスは、まずそう思った。セシーリアと仲良くなった頃から、何かに渴いている自覚があった。しかし、その頃はまだ何に対する飢えかに気付いていなかった。

ただ漠然と恐怖を感じた。

何故かは分からない。けれど確かに、それは恐怖だった。そしてその渴望は、歳を経る毎に次第に強くなっていった。

14歳になった頃には、同級生が憧れる対象——美しい女性を目にした時、喉の渴きとなって現れた。喉が渴き、水分が欲しくて仕方がない。口の中までがカラカラになって、声が出しにくくなる。けれど、カップの周囲に水滴がつくくらいの冷たい水を、一気に口に流し込んでも、まだ口の中は渴いていた。

これは何だ……？

何も知らなかったコーネリアスは、街で彼女らを目にするとき、喉が渴くのだと同級生の仲間たちに漏らしたことがある。

彼らは一笑に伏した。少年たちは不自然なくらい大人ぶった口調で言ったものだ。

「おいおい、バートランド。そんなに飢えてるなら、今度一緒にこっそり寮を抜け出すかい？」

「そういえば、エドガーがよく行く宿を教えてくださいました。……試してみるか？」

「一度行ってみても良いと思うね。計画を立てようじゃないか。」  
エドガーは寮長である先輩で、とんでもないいたずらもよくしたし、冗談を言わずには3分も保たないような男だったが、家柄も成

績も申し分なく、加えて故郷には弟妹が何人もいて面倒見が良かった為、後輩達にはとても人気があった。

……本当に冗談好きなエドガーが言ったことは、何処までが本当のことか判断が付きかねることも多かったが、『誰にも内緒で』と『大人になる儀式』と称された計画に惹かれ、仲間たちは大袈裟に、冗談半分に、そんな事を言い合った。

そうか、この感覚は肉体的な欲望なんだ。みんな同じことを感じているんだ。

ほっとしてコーネリアスは「自分は正常だ」と、自分を納得させた。

その頃から『それ』を目で追うようになった。誰かが怪我をしたとき、溢れ出る『それ』をうっとり見つめている自分に気付き、啞然とした。

僕は何を考えているんだ？！

黒く、赤く、艶やかに光りながら、ゆっくりと肌を這っていく『それ』。

『それ』は、とても美しくて、そして……。

美味シソウダ。

自分がそう思った瞬間、背筋を冷たい手で鷲づかみにされた気がした。

彼は無理矢理、自分の視線を『それ』から引きはがし、違う方へ思考を持って行こうとした。例えば美術室の裸婦画とか、明日提出しなければならぬ課題とか。裸婦画は思考が逸らされない上に同時に別の効果をもたらしたので、あまり役に立たなかったが、課題はいつもかなりの効果があった。

しかしその恍惚とした感覚は彼に例えようのない衝撃を残した。

それでも思い違いだ、自分はそんなものになど興味は無いのだ  
と言い聞かせた。頭の何処かが納得していないのを感じながら。肉  
体的な欲望だと思おうとした。絶対に違うのだと。

16歳の誕生日を迎えて半年ほど経った春、いつか冗談の様に言  
い合った『計画』を仲間の誕生日に合わせて実行した。先輩から教  
えて貰った宿は、そう遠くもない場所にあった。学生の相手にも慣  
れているようで、長い歴史のある寄宿学校の学生だと、どこかで分  
かっているような応対だったように思う。夜中に寮に戻るときも、  
女主人は何も言わずに、寮に近い裏門から5人を送り出してくれた。  
同級生と寮を抜け出した次の朝、彼は授業に出なかった。

部屋まで様子を見て来てくれた4人の仲間たちは親しみを込めて、  
下品な言葉で彼をからかったが、コーネリアスはいつものように冗  
談を返すことが出来なかった。彼の青い顔を見て、それまでからか  
っていた仲間たちは、本気で彼の心配をし始めた。

医務室に行って薬をもらえとか、数日はそこで寝ていろとか。  
仲間の一人など、「誰でも初めは上手くいかないものさ」と、見  
当はずれの慰めの言葉をかけていった。

友人達の気遣いは嬉しかった。心から嬉しかった。しかし、彼の  
心は友人達には手の届かない疑惑と不安に満ちていた。

——嘘だ。

だってこれは肉体的な欲望だった筈だろう……？

彼の渴望の半分は満足していた。コーネリアスに宛がわれた宿の  
女性は、どちらかというと上品だったように思う。エドガーに聞い  
ていたような、あけすけな態度や物言いはしなかった。目の色は覚

えていないけれど、薄い金色の髪の女性だった。体つきは線が細く、まだ若いのだろうと思わせたが、未経験の少年を上手に導いてくれた。

その瞬間、体は確かに悦んでいたし、満足感を覚えた。しかし、まだ違う何かを欲している自分に、彼は恐怖を感じていた。そして欲している『それ』が何であるかを、心の何処かで既に発見していた。

白い肌に触れる自分の指が無意識に、皮膚に透ける青い線を追うことも、華奢な手の甲に口付けるとき、そのまま歯を立ててしまいたくなることも。

けれど認めるわけにはいかない。

女性を腕に抱いたとき、同時に別のものを欲したなんて嘘だ。僕は普通の人間だ、正常なんだ。そんなものに興味なんて無い。……そうだろうか？

しかしその日はやってきた。更に彼を追い詰めるべく、唐突に。

## 1 (後書き)

コーネリアスの寄宿学校時代が中心の章です。

妙なところもあるかと思いますが、この頃のことを描く上で参考にしているいくつかの本もフィクションなので大目に見てやって頂けると嬉しいですT△T



それは、夕食後の談話室で、いつも一緒にいた仲間たちのうち、血気盛んな二人が口論を始めた日だった。

コーネリアスには仲の良い友人が4人いた。寄宿学校に入学して様々な友人ができたが、彼らには心から笑って話すことができた。よく喧嘩もし、殴り合いの喧嘩に発展したこともあった。

しかし、その日の喧嘩はいつもと違った展開を見せた。初めは言葉の応酬だったのが、いつの間にか口汚い罵り合いになり、立ち上がっての喧嘩になっていた。よくあることだが、それまで何について話していたのか思い出せないくらい些細なことが原因だった。

他の仲間たちと喧嘩の仲裁に入ったコーネリアスは、無我夢中で殴り合う友人を、こちらでも無我夢中で押さえた。

思うように動けなくなった当事者の二人は、止めに入った仲間たちにも罵りの言葉を浴びせた。その刃は容赦なくコーネリアスにも向けられた。

「父親がお偉い公爵様だからってなバートランド……！」

伯爵家の跡取り息子、ナサニエル・ウェリングフォード——愛称ネイサンは罵倒する言葉の合間にコーネリアスにそう言った。

その場は凍りついた。父親が爵位を持たないウィリアム・パターソンと、父親の肩書きが身分的には一番高いコーネリアスは、共に真っ先に顔の色を失った。5人の仲間全員が動きを止め、一瞬置いて我に返ったネイサンは、ウィリアムとコーネリアスよりも青い顔になった。

「すまない！……違うんだ、コーネリアス！頭に血がのぼって……」  
しどろもどろながらも一生懸命、友は謝った。

「……僕の親友達は身分差別主義者なんかじゃ無いと思っていたよ……。」

ぽつりとコーネリアスは誰に言うともなく呟いた。しかし、その言葉は、先ほどコーネリアスに投げかけられた罵倒の言葉よりも深く、ネイサンを傷つけたらしい。

ネイサンは傷ついた表情を瞳に浮かべ、それでもコーネリアスに謝った。

「本当にすまない、コーネリアス……。頭に血がのぼって、まともにものを考えていなかったんだ。ただ君を傷つけようとしていたんだと思う。そんなこと、普段は全く考えていないよ。」

苦しそうに息を吸い、まだ凍りついている他の仲間たちにもネイサンは謝罪の目を向けた。

「……君がそんなことを鼻にかけるような人間じゃないのも解ってる。僕は差別主義者じゃないつもりだ。」

コーネリアスは真っ直ぐにネイサンの瞳を見た。ネイサンの明るいブルーの瞳は誠実な光を宿し、仲間たちを傷つけた苦痛を浮かべて今にも泣き崩れそうに見えた。その美しい水色の瞳はセシーリアを思い出させた。コーネリアスはネイサンがどういう人間かを知っている。この学校で最初に隣の席に座った、静かな物腰の少年。ネイサンとコーネリアスは、最初に友人になり、一番の親友だと思っている。それだけに彼の安易な台詞はコーネリアスを傷つけた。

コーネリアスたちがこの学校に入学してから、先輩の少年たちは身分による縦社会がどういうものかを彼らに教えた。エドガーのように気に入った後輩達を護ろうとする者も中にはいたが、大半は貴族特有の差別的な態度を傲慢にしていた。そしてそれは、同級生同士でも存在する意識だった。

爵位を持たない家庭からやってきた少年たちは、特に酷い嫌がらせを受けていた。ウィリアム・パターソンもその一人だった。大半が爵位を持つ家庭出身の少年たちで占められる中、ウィリアムがい

くら彼らより良い成績を収め、教師達の信頼が厚くても、それだけに彼は他の少年たちよりも酷い扱いを受けた。

コーネリアスはウィリアムが好きだった。色素の薄い胡桃色の髪を持つ、大きな深緑色の瞳の、努力を苦とせず優しく微笑む少年がウィリアムと自然に仲良くなったコーネリアスは、やはりウィリアムと親しくなっていくネイサンが自分と同じような考えであることを知っていた。

コーネリアスは、ここに来て間もなくから、父親が公爵であるというだけで正反対の、2種類の対応を受けていた。一つは仲間意識。自分たちと同じ『高貴な』出身だという扱い。もう一つはそれとは逆の意識。ネイサンが言ったような『お偉い公爵様』という扱いだ。コーネリアスが何を言っても、何をしても、それらの扱いは変わらなかった。

最初の頃は訳が解らなかった。自分が何故2種類の扱いを受け、自分が何をしても同じ反応しか返ってこないのかが。現在、行動を共にしている仲間たちは、入学してから、かなり経ってから出来た仲間である。

彼らと仲良くなるまで、コーネリアスがすることに、反対したり賛成したり、コーネリアスが知っている親しみを込めた反応を返してくれるのはネイサンだけだった。

コーネリアスは人の心の動きに敏感な少年であり、それ故に早くから孤独を感じていた。同級生たちは自分を、父の跡継ぎとしてしか見ない。ネイサンが出身に関わらず自分を好いてくれているという事実は、寒々としていたコーネリアスの心に、一条の光をもたらした。

同級生達が言うところのパターン「なんか」と仲良くなったコーネリアスは、2種類のどちらからも微妙な距離を取られるようになった。良く言えば、お互いに心地良い距離を取れるようになったということかも知れない。悪く言えば、表面上は仲良くできるが、それ以上は踏み込まない関係ということだろう。正直に言えば、そ

うしてくれる方が楽だった。

ネイサンやウィリアムと一緒にいるうちに、各々が気付いていなかった様々な心の動きを、お互いに気付くことの出来る仲になっていった。勿論そこまで仲良くなるには相当の時間を要したが。

だからこそ、ネイサンは自分の言葉がコーネリアスとウィリアムをどれだけ傷つけたかを悟っていた。ネイサンは真摯な眼差しで熱心にコーネリアスに謝罪の言葉を向けた。同時にそれはウィリアムに向けた言葉でもあった。だが、コーネリアスもネイサンも、謝罪の言葉を向けるのも、許しの言葉を向けるのも、お互いだけに留めていた。それらをウィリアムに向けるのは、それ自身が彼を傷つけるであろう事を知っていたから。無邪気な悪事を3人は既に体験していたのだった。

ネイサンを許すとコーネリアスが言ったのは、彼も自分の言葉に驚いていたことに気付いていたからであり、きっと部屋で一人になってから、ネイサンが独りで思い悩み、自分を責めるであろう事を、彼がそういう性格であることを知っていたからだった。

いくら頭に血がのぼろうと、彼が口にした以上、心の何処かにそういった意識が潜んでいる筈だ、とネイサン自身も思っていることに気付いていたから。

僕が知っているネイサンならば、彼は既に自分自身を責めている。これが如何に僕たちを傷つける出来事かを、ネイサンは知っている。きつと今夜遅くには、僕たちの信頼を裏切ったと思うことだろう……。

## 2 (後書き)

あと1話で第二章が終了です。

暫くして、仲間たちはいつものように、互いに肩を叩き合い、穏やかな表情で別れた。部屋が他の仲間たちより近くにあるウィリアムと、ゆっくり歩き出しながら、ウィリアムの瞳の中に傷ついた表情がないか、探していたコーネリアスは、ウィリアムもコーネリアスの瞳に同じような感情を探していることに気付いた。

二人は、改めてお互いを気遣っている自分に気付き、また友情が深まったことに気付いた。お互いの行動に照れながらも、更に二人共がネイサンを心配しているのを確認した。

「ネイサンが心配？」

二人で歩く暗い廊下で、いつものように穏やかにウィリアムが尋ねた。

「心配だよ。きっと僕以上にショックを受けていると思うから。」

「僕らが知ってるネイサンなら、必要以上にショックを受けているだろうね。」

ウィリアムは微笑みさえた。

「……僕は君たちが大好きさ。いつか詳しく話すよ、大人になったらね。あの時、本当は家に帰ろうと思っていたんだ。僕はここが場違いな場所だと感じていたから。」

『あの時』というのはきっと、コーネリアスが初めてウィリアムに声をかけた時の事だろう。ウィリアムは続けた。

「君が僕に近付いてきたのは、皆と一緒に僕を馬鹿にする為だろうとさえ思ったよ。」

少し考えた後、コーネリアスは応えた。

「実は、君にそう思われてるだろうなって思ってたよ。」

コーネリアスの言葉にウィリアムは驚いたようだった。

「コーネリアス、不快じゃなかったかい？」

「いや、僕も君と別の意味で同じような扱いを受けていたから、当然だと思った。……多少は心外だったけど。」

柔らかく笑ってコーネリアスはウィリアムに言った。ウィリアムも笑った。

「公爵家の君は、伯爵家のネイサンとずっと一緒だったからね。上流階級同士で居たい部類の人なんだと思っていたんだ。」

「誤解の無いように告白するけど、僕は君を君として好きだよ。大切な友達だとね。」

「解ってるよ。僕も君が君だから親友だと思ってる。」

「……ネイサンもね。」

「勿論。……彼はきつと今夜、自分を責め続けるだろうね。」

「だろうね。ジョージとサムも心の中では心配していると思うよ。」

今日、ネイサンと喧嘩をしたのはジョージだった。ジョージ・ヘンドリックはトビアス子爵家の三男である。彼には兄が二人と姉が一人、加えて妹が二人いる。兄弟が多いので、面倒見は良いのだが、激しやすい性格であることが災いすることが、よくあった。

もう一人の仲間、サミュエル・バーネットは、サムと呼ばれている。彼はジョージの母方の親戚にあたるらしい。バーネット子爵家の次男である。兄と弟・妹が、それぞれ一人ずついる。彼は陽気で、いたずらには率先して参加する性格の少年だったが、いつも抜け目なく、彼が参加したいたずらは絶対に犯人が誰か、ばれることが無かった。

「ネイサンは本当に良い友人を持ったと思わない？」

いたずらっぽく微笑んで、ウィリアムは言った。

「全くだよ。本人が気付いてくれていると良いんだけどね。」

二人は笑い合いながら、ウィリアムの部屋の前で別れた。

晴れやかな気持ちに満たされたコーネリアスは、いつも自分の心に重く沈んでいる悩みをすっかり忘れ去っていた。

寄宿舎のベッドの上で一人になったとき、彼は掌が出血していることに気付いた。

ジョージのカフスボタンだ。ジョージは面倒見が良いのに、自分の面倒はあまり見ない。欠けているのに、全然気にしていないんだから。きつと止めに入ったときに擦ったんだな。……全く困った奴だ。

彼は腕にも打撲傷があるのに気付いた。名誉の負傷だ、と温かく微笑みながら、他にもないかと腕をまくって痛みを探す。

あったとしても、大したことは無いな、きつと……。

何の疑いもなく、幼い頃から変わらない仕草で、傷口を口元に持って行った。

気付いたときには遅かった。

自分の唇に掌を押しつけたまま凍りつく。

『それ』を『美味』だと感じた瞬間、彼は理解した。

僕はこれに渴いていたんだ……。

継いで心が叫んだ。お前は化け物なんだ、と。

僕は化け物だ——……。

彼の世界に、足元から、蜘蛛の巣のような亀裂が走った。そのままゆっくりと崩れていくのを、コーネリアスは呆然と感じていた。今まで脚を乗せていた世界が、ガラスのようにバラバラに割れていく。

肉体的な欲望と同時に存在する、もう一つの渴望。同級生が夢想到に誘い込む様な美しい女性を見て感じる、他の同級生と同じ欲望と、全く違った渴き。彼女らの肉体を見て欲望の中に浮かぶ、もう一つの対象。白い肌に透ける青い筋を見てこみあげる欲求……。脈打つ



首筋を見て無性に欲しくなるもの……。

瞳を閉じ、暗闇を見つめる。崩れてしまった自分の世界が、破片になってゆっくりと舞い上がり、音も無く自分の身体を突き刺していく。胸が血を流している、と彼は思った。いや、違うな。誰かが僕の中で、外に出せと内側から胸を叩いているんだ。

どれほどの間、そうして痛みを眺めていたのかは解らない。ふと瞳を開き、見慣れた天井を眺める。

震える唇から話した掌の傷口は、跡形もなく消えていた。

「僕は傷を消す能力で一儲け出来そうだぞ。」

普段持て余しているユーモアが頭をもたげて彼は一人そう呟いた。

……直後に目尻から涙が伝っていった。温かい滴は漆黒の髪に吸い込まれていく。

傷の無くなった掌をそのまま顔に押しつける。そのまま、いつかセシーリアがしていたように、声を殺し、肩を震わせて、涙を堪えた。眉間が盛り上がり、瞼が震える。噛み締めた顎の痛みにも気付かなかった。堪えた筈の涙は次から次へとこめかみを伝って流れていく。

何でなんだ……。今まで何ともなかったじゃないか……。！ 何で気付いたりしたんだ……。！

そう思いながらも自分では気付いていた。多分、最初から、痛む瞼の裏側に、まだ自分に向かって降りかかってくる破片が、きらきら光っているのが見えた。

その次の朝、彼はやはり授業には出られなかった。



### 3 (後書き)

いろいろカットして、やっと3000文字以内に収まりましたT△T  
いつか番外編を書くことがあったら、5人が一緒のお話をもう少し  
書きたいなあと思います。

第二章はこれで終了です。今日の更新もここまでにします。

「コニー坊ちゃん！」

コーネリアスは、一気に現在へ引き戻された。ドアに目をやると乳母が立っている。

「やあ、ポリー。ただいま。」

微笑んで立ち上がる。コーネリアス本人は全く気付いていないが、その微笑みは、洗練された貴婦人の集まるロンドンにおいても、彼女達に溜息をつかせるのに十分な魅力を備えていた。

「お帰りなさいませ。……お元気そうで。」

乳母は喜びの涙を光らせながら微笑んだ。

ここ数年は、帰ってくる度にこんな調子だ。こちら屋敷の方がロンドンに近く、彼が帰ってくる頻度が高いことに加えて、ポリーの夫・ザックがこの屋敷の庭師である為、公爵夫妻が別の屋敷に移った時も、ポリーは彼らに付いて行かずに屋敷に残ったのだった。コーネリアスの父・シアリーズ公爵は、仕事をコーネリアスに譲って隠居を決め込み、妻レイチェルと季候の良い別の領地の屋敷にいる。乳母の赤毛は前に見たときよりも色褪せてきたようだが、まだまだ若々しく、動作も力強かった。迷いのない動きで、乳母に歩み寄り、抱擁を交わす。コーネリアスの育ての母は実質、このメアリー・クラーク——愛称ポリーだった。優しく抱きしめて頬にキスをする。

「ポリー、また太った？」

穏やかに問いかける。

「まあ！それが女性に対する台詞ですか！」

快活に笑ってポリーが言う。

「これでロンドン一の色男なんて言われるのだから不思議ですわね。……全く、うちの坊ちゃんは。」

まだ笑いながら、少し誇らしげに言われ、コーネリアスも笑った。「どこから仕入れてくるんだい？ロンドンでの僕の評価なんて。」

「何とでもなりますよ。」

自分は万能の神だと宣言するようにポリーが言う。

「ザックはどうしてる？」

「元気にしてますわ。もうすぐご挨拶に来るでしょう。」

「ギルやジェシカにはさつき会ったけれど、他の皆は変わりなく過ごしているかい？」

ギルはこの屋敷の料理長、ジェシカはまだ若いメイドである。ジェシカはギルの末の娘で、コーネリアスも彼女が生まれた頃からよく知っていた。

自分の故郷で、懐かしい人達に温かく迎えられる。これほど幸せな事が他にあるだろうか。いいや、ないさ、とコーネリアスは言い聞かせるように自答した。

ポリーの親愛の情に満ちた近況報告を聞きながら、紅茶のカップを口に運んだ。

ふとまた壁にかかった絵が目に入る。4人の仲間たちがここに遊びに来た時に描いて貰った絵があった。

コーネリアスの父、シアリーズ公爵には高名な画家の友人が居る。何年かに一度、その画家はこの屋敷を訪れ、シアリーズ公爵との旧交を温めるのだ。その滞在の折りに、大きな肖像画を依頼されて描くこともあったが、多くの場合は今、コーネリアスが見つめているような小さなスケッチのような作品を描いていた。描かれている人々がポーズを取っているものもあれば、日常の何気ない動作を描いたものもあった。コーネリアスの居間の壁は、一部がこの小さな絵で埋まっている。

コーネリアスが今、見ている絵の中の5人は、17歳くらいだろうか。コーネリアスと、ネイサン、ウィリアム、ジョージ、サムが描かれていた。一様に弾けるような笑みを浮かべ、庭で球技に勤しんでいる。この絵は画家のスケッチで、どの少年もこちらを見てはいない。今にも囁きたてる声や、大きな笑い声が聞こえてきそう

絵だ。

あどけない笑顔の中に、どこか影を落とすコーネリアスの表情を、画家は的確に捉えていた。まだ決定的な事実には気付いていなかった頃だろうけれど、大人になった自分が見るその表情は、やはりどこか苦悩の影が見えた。

この絵が描かれた夏、セシリアは家にいて、コーネリアスの友人たちに会いたがった。あの夏のことは煌めくような大切な思い出だが、自分がセシリアを友人たちから引き離しておこうとして必死だった部分は、あまりに照れくさくて思い出したくない。

なんだか胃の辺りがざわめき、肩を竦めたくなるような気持ちに襲われ、コーネリアスは隣の絵に視線を移した。そこには19歳くらいの3人の青年が微笑む肖像画が飾られていた。

この家の居間にあるソファの左にネイサン、右にウィリアムが腰掛け、その後ろにコーネリアスが立っている。画家の秀作として、3人がモデルを務めた肖像画である。

ネイサンはどこか緊張した面持ちで、照れくさそうに微笑んでいる。今のネイサンと比べると、やはり「少年」といった印象を受けた。今よりも線が細く、そして……

影がない。

コーネリアスは、ぼんやりとそんなことを思った。

ネイサンの右に座すウィリアムは今にも喋りだしそうな瑞々しい表情で、穏やかに微笑み、こちらに目を向けていた。深緑色のウィリアムの瞳は、そこに反射する光が揺れているようにさえ見える。

懐かしい友の、穏やかな笑顔を眺めながら、彼の意識はまた記憶の川を辿り始めた。

それは、コーネリアスが20歳の早春のことだった。コーネリアスとネイサン、ウィリアムはオックスフォードの学生になっていた。ジョージとサムは実家近くの方の大学に進学しており、その頃には手紙のやりとりはあるものの、会う機会は少なくなっていた。

ある日、父に呼び戻されてコーネリアスは故郷に戻った。内心では解っていた。父はまた結婚を促そうとしているのだろう……。きつとセシーリアとの婚約、その確約が欲しいに違いない。とはいえ、セシーリアはまだ15歳だ。いや、『まだ』とは言えないか……。

コーネリアスは複雑な気持ちを抱きつつ、故郷に出発した。ネイサンとウィリアムは、コーネリアスの今回の旅行が気の進まない帰郷であることが、見通せているようだった。二人はいくらか苦い微笑みを向けてコーネリアスを見送った。

「道中、気をつけろよ、コーネリアス。」

ウィリアムが言った。いつもの穏やかな微笑みを浮かべて。

「お父上が何を言っても、逃げおおせることを祈ってるよ。」

ネイサンが笑いながらからかう。

「一週間で帰るから、帰ってきたら報告するよ。」

冗談を返しながらコーネリアスは出発した。いつもと何ら変わりはない。10年近く一緒に居る親友との、何度となく交わした、ありふれた光景。

コーネリアスは何の疑いもなく、一週間後には三人でまたとるに足りない会話を楽しめると思っていた。

……彼は、全く疑っていなかった。

## 1 (後書き)

セシリアが出てきません……T△T



一週間の帰郷は、コーネリアスの父に何の成果ももたらさなかった。

まずセシーリアが、彼女の叔母の家から帰っていなかった。セシーリアの叔母は少女たちを集めて行儀作法を学ばせている。セシーリアも叔母のもとで学んでいるところだった。コーネリアスが帰郷することを知っていたら、セシーリアは実家に帰ってきていたかも知れないが、コーネリアスは頻繁にやりとりする手紙にも、何も書かなかった。

次にレイチェルが風邪をひいて寝込んだ。彼女は愛犬のお産に付き合って、一晚を厩舎で過ごし、5匹の可愛らしい子犬を最初に抱き締める栄誉と共に、風邪菌の熱烈なアプローチを受けたらしい。慌てふためく父を宥め、レイチェルがとり上げた子犬たちの近況を彼女に知らせている間に、時間は飛ぶように過ぎていった。

そのお陰で、父のさりげない催促を、のらりくらりと交わして、コーネリアスは逃げ延びた。

しかし帰郷の間ずっと、何故か彼は生まれ育った我が家にいるにも関わらず、落ち着かなかった。

落ち着かない。

今思えば、あれを『胸騒ぎ』と呼ぶのだろう。とにかく心が波打ち、嵐の前触れを感じているような気持ちで、早くオックスフォードに戻らなければと思った。いつもの吸血欲求とも違う。

では何故僕はこんなに慌てて馬車を走らせているのだろう……？ 胸の辺りにじわりと広がる不快感。その不快感はざわざわと範囲を広げている。一体どうしたんだ？

近くの町で一泊して、早い時間にオックスフォードに着くと、コ

ーネリアスはその足で、まず大学に立ち寄った。ネイサンとウィリアムに会いたかった。一刻も早く。それまでこんな感覚に陥ったことはなかった。けれど、コーネリアスはどうしても二人に会わなければと思っていた。構内を早足で駆け抜け、ウィリアムやネイサンがいそうな場所に、彼らの姿を探した。

……見あたらない。不意に背中を何かが這っていく感覚を味わった。これはなんだ？

「やあ、バートランドじゃないか！ 戻ってきたのかい？」

見知っている教授が手を振った。コーネリアスは逸る気持ちを抑えて挨拶を交わした。

「そうだ、君はもう聞いたかい？ ……本当に残念だよ、彼らは本当に真面目で良い生徒だった。将来も有望だったのに。」

不意に彼が哀しい眼差しで、重々しく言った。

コーネリアスの冷たい額に、更に冷たい汗が流れていく。

「どういふ……ことですか……？」

教授は少なからず慌てた様子だった。

「聞いていないのかい？」

コーネリアスが、帰省していたこと、オックスフォードに戻って来たところで、そのまま大学に立ち寄ったのだと説明する。教授は更に重々しく口を開いた。

「ミスター・パターソンが亡くなったんだよ。殺人だと言われている。……犯人はミスター・ウェリングフォードだよ。」

ウィリアムが……死んだ……？

理解するのに時間を要した。

ウィリアムが……？ ということだ？ 先週別れた時はいつもの様に微笑んで気をつけるよと声をかけたウィリアムが？

ネイサンが彼を殺した……？ ウィリアムと一緒に笑いながら僕をからかっていたネイサンが？

コーネリアスは完全にパニックに陥っていた。

みるみる白くなっていくなかに彼の顔を見て、教授は悔やみの言葉を呟いて足早に去っていった。突然、足の感覚が無くなった。ドサリとベンチの一つに倒れ込む。頭の中は誰かに掻き回され続けているようだ。目眩がする。

そこに呆然と座っていると、何処からか話し声が聞こえた。彼の座っているベンチの後ろ、植え込みの向こうで誰かが囁き合っている。

コーネリアスを嘲ろうと、誰かがわざとそこで彼だけに聞こえる様に話しているようだ。ぼんやりとそんなふうに感じた。その声は馬鹿にしたように話し続けた。彼が知っていることを話し尽くしたらしい。全部話しても、コーネリアスが全く反応を示さないのので、聞こえていないのかと声の主達は諦めて去っていったようだった。

しかしコーネリアスには全て聞こえていた。何故その回転音が聞こえなかったのかと疑うくらい、彼の頭は激しいスピードで回転していた。

親友の死が、まるで汚らしいことであるかの様に声の主は話していた。それによると、二日前、ウィリアムとネイサンが言い争っているのが目撃された日にウィリアムが亡くなったのだという。更に、ウィリアムが亡くなった日の翌日、つまり昨日、ネイサンの部屋からウィリアムの財布が発見されたらしい。動機は、ネイサンがウィリアムの恋人に横恋慕したからだと言ったと、彼らは言っていた。

コーネリアスは、この数ヶ月間、二人の友人が何かを思い悩んでいることを知っていた。ウィリアムには尋ねたこともある。ネイサンは悩んでいるのを知られたくないタイプなので、何も言わなかった。ウィリアムの恋人の噂にも聞き及んでいた。噂の彼女はオック

スフォードに屋敷を構える男爵未亡人で、良い噂は全くなかった。彼女に横恋慕？ ネイサンの好みだとは思えない。……ウィリアムの好みだとも思えないが。

昨日逮捕されたネイサンが今朝、釈放されたらしい。声の主によると、人々はウェリントン伯爵が大枚をはたいて釈放させたのだと噂しているという。……それは本当だろうとコーネリアスは思った。他に容疑者が捕まっていないのに釈放となると、そういうことだろう。

しかしまだ、コーネリアスはネイサンの無実を信じていた。二人の親友達が殺し合う筈などない。互いを好んで傷つける筈などない。

ウィリアムが死んだ——……？

馬車を駆ってオックスフォードからロンドンに移動して、ウェリントン伯爵家の屋敷を訪ね、彼が来るのを待つ間も、コーネリアスはまだ呆然としていた。

## 2 (後書き)

改行が少なくなってきたでしょうか……。  
読みづらかったらごめんなさい。

コーネリアスが座っているソファの右手にあるドアが軋みながらゆっくりと開き、ネイサンが現れた。

その姿を見て、コーネリアスは啞然とした。黄金色の髪の毛は褪せ、顔は青ざめ、淡いブルーの瞳は輝きを失っていた。ネイサンは幽霊のようにふらりと応接間に入ってきた。心なしか頬がこけている。

コーネリアスはいたたまれなくなつて友に駆け寄り、生気のない身体を抱きしめた。

ネイサンは反応しなかった。

声さえ聞こえない。

胸が締め付けられる思いがする。コーネリアスは震える腕に力を込めた。

「ネイサン……！ 大丈夫か？」

言い終える前にネイサンが嘲る様に掠れる声で言い放った。

「お前も僕がやったと思っっているんだろう……？」

何故ここに居るんだと言わんばかりの口調。コーネリアスは腕に更に力を込めて怒鳴った。

「何を考えているんだネイサン！ そんなことあるものか！！」

一瞬の間をおいて、コーネリアスの怒気がこもった大声に、ネイサンは驚いたように身を離れた。そのまま間近から友の瞳を見つめる。ネイサンがそこに何を見たかは解らない。彼らの身長差は殆ど無く、コーネリアスは目の前でネイサンの瞳に涙がたまっていくのを見た。淡い色の瞳に僅かながら力強さが戻る。

コーネリアスは静かに自信を持って言った。

「お前のわけがない。お前がウィリアムを殺すわけがない。」

確信に満ちて断言したコーネリアスを至近距離で見つめたまま、

ネイサンの瞳から大粒の涙がこぼれていった。長い付き合いだが、コーネリアスはネイサンが泣くのを、この時に初めて見た。がっしりした身体が震える。

「コーネリアス……ウィリアムは……ウィリアムは本当に死んだのか……？」

声が出ない喉から言葉を絞り出すように、溢れた涙を拭うこともせずにネイサンが問いかける。

「わからない。数時間前に戻ってきたばかりなんだ。学校に行つて噂を聞いただけだから。」

自分の声が掠れていて驚いた。

「だが、ここに来る前にロンドンの僕の屋敷に立ち寄ったら、明日ウィリアムの葬儀があると知らせが入っていた。」

そこまで言い終えて初めて、コーネリアスは自分が泣いていることに気付いた。二人は今、亡くした親友を想って泣いていた。暫く二人は抱き合つて泣いた。

「何がどうなっているんだ、ネイサン？ 何故お前が容疑者にされているんだ？」

ネイサンはコーネリアスが何の疑いもなく自分を信じていることに、ここ三日間の絶望から僅かながら救われていた。ゆっくり彼は話し始めた。

「あの日の昼間に彼と言ひ争っていたというのは知っているか？」

コーネリアスはネイサンが「ウィリアムが死んだ日」と言わなかったことに気付いた。まだ二人ともウィリアムの死を受け入れられなかった。

コーネリアスは静かに頷いた。大学で噂になっていることは言わずにおいた。

ネイサンが言葉を継ぐ。

「僕はウィリアムの恋人……いや、レディ・ジェサミンについて忠告したんだよ。」

友が悩んでいたのはそのことか、とコーネリアスは密かに納得していた。

「それでウィリアムが怒ったのか？」

少々信じられない気持ちで、コーネリアスは尋ねた。

「いや、……。」

コーネリアスは、ネイサンを真っ直ぐに見つめたまま彼が話し出すのを待った。

「ウィリアムの恋人が、レディ・ジェサミンではないと知っていたかい？」

「違ったのか？」

この言葉には大いに驚いた。ネイサンはほっとしたように見えた。

「僕は『君の恋人』と呼んで忠告した。レディ・ジェサミンは実は……僕は彼女とベッドを共にしたことがあるんだ。」

ネイサンは、目を丸くして「相手は選べ」と言いたそうな友を無視して続けた。

「それを忠告して、ウィリアムが怒った。……そのうちにレディ・ジェサミンの名前が出て、ウィリアムと僕はようやく誤解に気付いたというわけだ。」

「それじゃ……」

「誤解に気付いた僕たちは、いつもと同じように大笑いして仲直りしたよ。ウィリアムはレディ・ジェサミンの誘惑は上手く交わしていたらしい。」

コーネリアスは、噂のレディ・ジェサミンに会ったことは無かった。

今までの話で確信が持てるのは、男爵未亡人であるレディ・ジェサミンという女性は、若い男性を特に好むようだ。勿論、今まで聞いていた噂も酷いものばかりだが。

「コーネリアス、ウィリアムが何かを思い悩んでいたのに気付いていたか？」

「ああ、君も彼も、悩んでいるのに気付いていた。ウィリアムには



一度尋ねたこともあるよ、何か力になれるかって。相当、深刻そうだったから。」

「君も」という言葉を努めて聞き流し、ネイサンは話を続けた。

「彼は何と応えた？」

「大丈夫だ、と。彼の言いそうなことだよ、手に負えなくなったら、その時は頼む、と。」

「そうか……。」

少し間が空く。

コーネリアスは直感的に、ネイサンに話を続けさせなくては、と思った。ネイサンは言うか言うまいかを悩んでいる。

コーネリアスがウィリアムに尋ねたのは二カ月も前の事だった。

その後、コーネリアスはウィリアムの悩みがどう進展したのか、全く知らない。悩みの内容も知らないままだったが……。

ふと、何かに触れたかのように、ネイサンは話したがっている、と思った。

彼は言い淀んでいる。何かが彼を止めている。

はっと息をのむ。

……ウィリアムに口止めされている……？ 僕にも言うな、と？

コーネリアスは少なからず傷ついたが、今はネイサンの事が先決だ、と思い直した。

「言ってくれ、ネイサン。他の誰にも口外しないよ。」

一瞬ネイサンの身体が強ばり、ふっと緊張が解けた。思いつめた瞳で呟く。

### 3 (後書き)

コーネリアスの、というよりネイサンの受難は続きます。

「コーネリアス、ウィリアムはミス・アラベラに恋をしていたんだ……。」

「何だって？」

まさか、と思うと同時に、納得していた。

そうか、ミス・アラベラか……。

茶褐色の髪のも、静かで恥ずかしがりやの女性が目に浮かぶ。読書や編み物が好きな、何かの影に隠れていたがるような女性。典型的な美女とはいえないが、整った顔立ちをしていた。

「何てことだ……！」

不意に全てを理解した。ミス・アラベラ・ボームントは、ボームント男爵家の娘であり、レディ・ジェサミンは義理の母親に当たる。ミス・アラベラの父は故人で、爵位は彼女の兄が継いだ筈だ。

近頃ボームント男爵家には良くない噂が後を絶たない。爵位を継いだアレン・ボームント男爵は義母であるレディ・ジェサミンに夢中で、彼女の言いなりだという話だ。それが本当なら……。

「その話は誰かに……？」

話したのか、と身振りで続ける。答えは既に解っていた。ネイサンはコーネリアスに告げるのも憚っていたのだから。

「いや、言っていない。……ウィリアムに悪くて。」

予想通りだ。もしも僕らの推測が正しければ、逮捕されるべきは、ミス・アラベラの家族だということだ。

「ウィリアムは……宝石店にいたことがあるな……。」

コーネリアスは遠くを見た。そこにあの日が見えるような気がして。タイピンの修理だという言葉を感じていた。

「プロポーズを……するつもりだったらしい……。」

ネイサンはそこで声を詰まらせた。

「僕は彼に考え直せと言った。少なくとも今は駄目だ、もう少し時期を見なければ、と。」

言いながら、またネイサンが涙ぐむ。

「それなのに何故……！」

痛々しい声で叫ぶネイサンに、友を想ってコーネリアスも涙ぐんだ。

「……財布を拾ったんだ……。」

涙を浮かべ、ソファにぐったりともたれて空を見ているネイサンが、呆然と言った。

「図書館に置いてあった。いつものようにウィリアムが本に夢中になって、忘れていったんだと僕は信じ込んだ。部屋に戻ったときに、その財布を落とした。中から指輪が出て来た……。ウィリアムはそんな大切な物を忘れていくような奴じゃないだろう？ 何かあったのだと思って慌ててウィリアムを捜した。彼が行きそうなところを思いつくままに……。」

ネイサンは堰を切った様に、一気に話した。

ということは、ネイサンは罠に落ちたのだろう。その時にはきつと既にウィリアムは……。

まだ実感がわかないまま、やけに冴え渡った頭でそう感じた。きつと放っておいても、真犯人はすぐに逮捕されるだろう。

コーネリアスはネイサンを連れて、ウィリアムの葬儀に出席した。サムとジョージに連絡することも考えたが、事件が解決するまでは巻き込まない方が良くと思い直した。二人とも、ウィリアムの葬儀に出られなかったと知ったら悲しむだろうが。

予想はしていたが、パターンソン卿夫妻は涙ながらにネイサンを罵った。ネイサンは悲しい瞳で黙っている。……甘んじて受けるつも

りなのだと、コーネリアスは解っていた。

人殺し！よくもおめおめと葬儀の場にやって来られたものだ！……容赦ない言葉がネイサンと、彼と連れだってやってきたコーネリアスに向けられる。特に容疑者になっているネイサンには。

「人殺し」、「ウィリアムを返せ」。苦痛に満ちた彼らの言葉を理解することは出来たが、言葉が耳に届くたび、くり返し心を鞭打たれるようだった。隣に立つネイサンは静かに頭を垂れ、痛みに耐えているようだ。

コーネリアスは、泣き叫んでいる夫妻に静かに告げた。

「パターソン卿、僕たちはウィリアムの親友だと自負しています。犯人はナサニエルではありません。……絶対に。真実は間もなく明るみ出るでしょう。」

何か言い返そうとする夫人を目で制する。

「お願いです、愛する親友に別れの言葉をかけさせて下さい。」

パターソン卿は流れる涙を拭うことも忘れてしまったかのように、一心にコーネリアスを見つめる。その視線に敵意が見え隠れするのを、コーネリアスは感じていた。

息子が死んだとき、この青年はロンドンに居なかったと聞く。もとより長期休暇や週末に、何度も我が家に招いた、息子の親友と紹介された青年達だ……。しかしだからこそ許せない。彼らは親友だと言いながら、息子を虐めていたのではあるまいか。ロンドンに居なかったこの青年も、何らかの方法で容疑者の青年と連絡を取り……。

心の空洞は、普段は穏やかなパターソン卿の思考も、感覚さえ蝕んでいく。

「僕たちは、ウィリアムを殺すくらいなら自らの命を絶ったでしょう。……神に誓って、ナサニエルは無実です。」

年若い青年の言葉には確信がこもっていた。しっかりした声とはうらはらに、その瞳は涙に揺れている。

もしや彼らの言うことは正しくて、真犯人は他に居るのだろうか？  
彼らは本当に息子の死を悼む親友なのか……？ いや、しかし証拠になる財布が見つかったと聞く……。

コーネリアスはウィリアムに似た、深緑の瞳に様々な考えが去来するのを、祈るような気持ちで見つめていた。

暫く睨み合っていたが、とうとうパターソン卿は道を空け、彼らを通した。

疑わしきは罰せずという結論に至ったということだろうか。

「君に免じて彼を通そう。……しかし」

礼を言おうとする二人を制して老パターソン卿は続けた。

「彼が無実だと証明されるまで、二度と息子の墓にも我々の家にも近付くな。……我々は君らを歓迎しない。」

一年前に招かれて会ったときと比べると、明らかに年老いて見えるウィリアムの父親は、震える声で付け加えた。

「……歓迎できない。」

コーネリアスとネイサンは静かに頷いた。

#### 4 (後書き)

愛称が「ネイサン」なので、あまりフルネームが出てきませんが、彼の本名は「ナサニエル」さんです。

名前が無いと不自然かと、本筋に関係のないキャラクターまで名前を出してしまっているのも、ややこしいことになっているかも知れませんね＞＜。

お名前の一覧表とか作った方が良いでしょうか……。

夜、もう1話更新しようと思っています。

息をしていない親友の柩に歩み寄り、そっと跪く。

「やあ、ウィリアム……」

いつものように声をかけて、いつもはしない仕草で頬を撫でる。

……冷たい。

親友を永遠に失ったことを、彼がもはや二度と笑うことが無いということを、初めて実感した。

彼は息をしていない。

彼は瞳を開けない。

彼はもう、あのいつもの穏やかな声で話すことはない。

僕らはもう、よくしたように冗談を交わすことも、喧嘩をすることもなく、失恋を慰め合うこともない。

結婚式には、互いに花婿付添人になろうと約束したのに。少なくとも、僕は君の付き添いを努めるつもりだった。バチエラーパーティーだって企画するつもりでいたんだよ。それは近い将来だと思ってた。

寄宿学校でのあの日、言ったじゃないか、『いつか詳しく話すよ、大人になったらね』と。……まだ聞いてないよ、ウィリアム。もう僕らは大人と呼べる年齢になったのに。君は苦しい思い出を抱えたまま逝ってしまったんだろうか。もっと早く尋ねれば良かったんだろうか。

いつかバラバラに離れてしまっても、白髪になっても、仲間たちで集まって馬鹿話をしようと言ったじゃないか。君は「髪が薄くなっているもからかわないこと」なんていう約束まで取り付けたのに。もう、君がどんなふうに歳を取っていくか、確かめることは出来ない。



二度と会えないところにこんなにも早く逝ってしまうなんて。

堪えることなど出来る筈がなかった。コーネリアスは嗚咽を漏らしながら、冷たい友の頬を、指の背で撫で続けた。

ウィリアム、ウィリアム、ウィリアム……！ 早すぎるよ！！

柩の中に隙間無く敷き詰められた春の花々が、コーネリアスの涙の滴を受けて煌めく。一粒落ちるたびに響くように揺れる。熱を持った耳に、ネイサンが同様に嗚咽するのが聞こえた。きっと彼も僕と同じように、心の中でウィリアムに語りかけているのだろう。いや、待つようにという親友の言葉に従わなかったウィリアムを叱りとぼしているのかも知れない。

二人の青年が、友の柩の側に跪き、人目を憚ることもなく、嗚咽し、大粒の涙をこぼしている。

その光景は人々の心を激しく揺さぶったらしい。初めはネイサンを見て、ひそひそと陰口を叩いていた心ない人々も、今では一様に貫い涙に沈んでいた。

式が終わり、友の柩が土の中に見えなくなっても、二人はまだウィリアムの真新しい墓の前に立ちつくしていた。ウィリアムのきょうだいや両親が目を逸らす。彼らも半信半疑なのだろう。ウィリアムが少年だった頃から何度か共に過ごしたウィリアムの親友達。その一人がウィリアムを殺した。もう何を信じて良いのか解らない。……ウィリアムが死んでしまったんだ……。

彼女を発見したのは、墓地から辞す時だった。

喪服に黒いベールをつけた若い女性。墓地の周囲に張り巡らされた黒いフェンス越しに、遠くからウィリアムの墓標を見つめている女性。ネイサンも気付いたようだった。

さりげなく、ゆっくり彼女の方へ歩いていく。どうやら付き添いもなく来たらしい。

「ミス・ボーモント」

声をかけたのはコーネリアスだった。

涙に濡れた顔が、感電したように震え、息をのみながら振り向いた。

二人をとらえた瞳から、どんどん涙がこぼれていく。

「ごめんなさい。」

意外なくらいしつかりした声でアラベラが言った。ウィリアムの家族と同じように、彼女に罵られるかと身構えていた二人は、その真意を測りかねて、無言で立ちつくしていた。

「これから、話をして参ります……。本当に申し訳ありませんでした、ミスター・ウェリングフォード。」

彼女は知っているのだ……！

二人は同時に、彼女が言わんとしていることを悟った。彼女は真実を知っていて、それを警察に話すと、そう言っているのだ。

弱々しく見える彼女は、物影に隠れて何もなかったような振りをする女性ではなかった。震える脚で立ち、よろめきながらも進む強さを持っていた。

涙をこぼしながら、まっすぐにコーネリアスとネイサンを見る瞳には、これから自分の身に降りかかることへの覚悟が見えた。

暫く無言で立ちつくした後、ネイサンが唐突に彼女に手を差し出した。

「ウィリアムからです。」

短い一言。アラベラは問いかけるようにネイサンを見、何かが握られているらしい手を見た。

「……貴女には、もう会えない予感がするから。」

ネイサンの言葉に背を押されたように、彼女はゆっくりとそれを受け取った。

手の中に落とされたそれを見たとき、アラベラの顔に瞬時に現れたのは驚きだった。次に喜びが、最後にまた悲しみが戻り、今度こそ彼女は泣き崩れた。殺しきれない嗚咽を漏らし、それでも声を殺そうと努めている。通りに座り込み、両手で包んだそれを、体中で包むようにしながら。

ウィリアムが愛の言葉とともに渡す筈だったダイヤモンドの指輪が今、彼女の手に包まれていた。

早春には珍しく、細かな雪が舞い降りてきた。涙に暮れるアラベラに降り注ぐそれは、どこか優しい気がした。

コーネリアスが勇気ある友の肩に手を置く。励ましと慰め、そして賞賛を込めた仕草だった。

コーネリアスは彼女を見つめて言った。こんな台詞を言ったことに自分でも驚いたが、それはすらすらとコーネリアスの口から流れ出た。

「ウィリアムの後を追おうなんて考えないでください、ミス・ボーモント。もしそうしても、彼はきっと貴女を迎えには来ない。」

悲しみを湛えた目で、アラベラ・ボーモントは二人の青年を見上げた。そこに何を見たのかは分からないが、彼女はとめどなく涙を零しながら、ただ頷いた。

## 5 (後書き)

思いの外、長い章になっていますが、まだ3話ほど? ?続きます。  
今日の更新はここまでですが、今週中にこの章を完結させたいと思っています。

「君の友人であることを誇りに思うよ。」

アラベラと別れ、バートランド家のロンドンの屋敷に落ち着いた時、コーネリアスが言った。

ネイサンは居間のソファに腰掛け、コーネリアスはブランデーを持ち出しているところだった。その言葉を受けたネイサンは小さく微笑んだ。

「同じ言葉を君に返すよ、コーネリアス。」

別れ際、嗚咽を含んだ辿々しい口調で、アラベラはまたネイサンに謝った。葬儀に出たいばかりに汚名を着せて本当に申し訳ないと。

「もう一度だけ……彼の顔を見られればと……。」

ウィリアムの面影を、大切にしまい込むように目を閉じ、また謝罪の言葉を重ねる。ネイサンは静かに答えた。「貴女はウィリアムの最愛の人だから、それくらいいなくては、いつか再び彼に会ったとき、申し訳が立たないのだ」と。

彼女がすぐに真実を話さなかったためにいくつもの深い傷を負ったのに、ネイサンは、その彼女に優しく微笑んでさえ見せた。「誇りに思う」という言葉でも足りない気がする。

ネイサンに泣きながら「ありがとう」と「ごめんなさい」を繰り返したミス・アラベラを思い出す。コーネリアスはブランデーと一緒に、ミス・アラベラの将来に対する憂いを飲み込んだ。

真実が判ったとき、ウィリアムの家族はさぞや誇りに思うことだろう。彼らのウィリアムは世界一の友人を持っていたのだ。ナサニエル・ウェリングフォードという名の。

数日後、ミス・アラベラ・ボーモントが修道院に入ったという話

を耳にした。直後、ボーモント男爵は逮捕された。

レディ・ジェサミンが画策し、自分に夢中だったボーモント男爵に、ウィリアムに襲われたと泣きついたというのが、ウィリアムの死の真相だった。自分に靡かない上に、地味な義理の娘と結婚したいと言った『馬鹿な男』に制裁を、と。

ボーモント男爵は、レディ・ジェサミンに唆されたときには既に泥酔していたらしい。ネイサンと別れてすぐに、アラベラとの結婚の許しを得る為にボーモント男爵家を訪れたウィリアムは、殴りかかったボーモント男爵に不意をつかれて倒れ込み、家具に後頭部を打ち付けた。男爵が気付いたときには息をしていなかったという。

命を奪うことまでは考えていなかったレディ・ジェサミンは、慌てふためいたが、ネイサンに罠を仕掛けることを思いついた。午後遅い図書館に残っていたネイサンを見越して、ウィリアムの財布を置いたのだった。

……そんな動機で、一人の親友を失い、もう一人の親友は心に深い傷を負ったのか。

コーネリアスは胸の奥で炎が揺れるのを感じた。

ボーモント男爵に続いて逮捕され、有罪宣告を受けたレディ・ジェサミンは、何処からか手に入れた毒薬で自殺したらしい。

パターソン卿夫妻から、丁寧な詫び状が、コーネリアスとネイサンの二人に届けられたのは、もう少し後のことになる。修道女となったミス・アラベラは、パターソン卿夫妻宛の手紙に、公に知らされるよりも更に詳細を書いて知らせたという。

二人に届けられた詫び状にはこう書いてあった。「葬儀の日、あんな風に迎えた自分たちを許して欲しい。息子を失った悲しみに善悪の区別がつかなくなっていたのだ。息子にはこんなにも素晴らしい友人達がいたことを、とても嬉しく思う。いつでも訪ねてきて欲しい」と。

夫妻からの手紙で新たに解ったこともある。

アラベラは、レディ・ジェサミンによって、結婚の話を進められていたらしい。若い彼女は、親よりも年上の老貴族に、いわば厄介払いされようとしていた。

その結婚を阻止する為にあの日、ネイサンが止めてもウィリアムはボーモント男爵家を訪ねたのだ。

柔らかな笑顔の友は、恋人をその意に沿わぬ結婚から救おうとして、その命を落としたのだった。

穏やかな声の友は、激しい恋に落ちていたのだった。

幸せな結婚を目の前に、その幸福を味わうこともなく、命を絶たれた優しい心の友は、しかし、思い出すときはどうしても、いつもの穏やかな微笑みしか思い描くことができなかった。

コーネリアスとネイサンは、それまでに増して言葉少なになった。親しい人たちの前以外では、近寄りがたい雰囲気を発するようになった。社交界のレディ達は、目がくらまんばかりの容貌の二人が舞踏会場に現れるだけでも沸き立っていたが、その近寄りがたい雰囲気は、何故か、より彼女らの好奇心と羨望の眼差しを集めていた。年を経るに従って魅力を増していく、濡羽色の髪と不思議な金色の瞳をもつ次期公爵と、きらきら輝く黄金色の髪と、どこか影のある空色の瞳を持つ次期伯爵の組み合わせは、危険な輝きを備えていた。二人は常に注目を集め、そして常に、自称花嫁候補に取り囲まれていた。

時間が経つに従って、公には抹消されたスキャンダルであるウィリアムの死は、人々の記憶からその姿を薄らげ、そしていつの間にか忘れ去られていった。

しかし、コーネリアスは知っていた。一度は容疑者として逮捕されたネイサンが、いつまでもあらぬ噂を立てられ続けていることを。家族にさえ傷つけられていることを。コーネリアスが釈放されたネイサンを訪ねた日、コーネリアスが到着する数時間前に、想いを寄せていた恋人に別れを告げられたらしいことを。

ネイサンの恋人のことは、実はよく知らない。寄宿学校を卒業してから、恋愛に関する話題が出ることは、ほとんど無かった。どこか照れくさかったのだろうか。

ただ、酔っぱらったネイサンが夢見るような瞳で、うつとりと彼女について形容した言葉は覚えている。「彼女の瞳には宇宙がある」。詩集よりも小説よりも実用的な書物を好む親友が、詩人だとは思わなかったとからかったのも覚えている。瞳の色のことだとネイサンは主張していた。彼女に会えば解るだろうが、会わせない、とも。独占欲そのままの言葉を聞いた仲間たちは、冷静なネイサンもとうとう陥落したかと笑い合ったのだった。



## 6 (後書き)

第三章5話の後書きで、「あと3話ほど?」と書きましたが、第三章は7話までにしようと思います。

ちよつと内容が本筋から逸れすぎているような気がしたので……。

カットした部分も、別のお話として書けたら良いなあと思いますT

△T

ネイサンが想いを寄せていた恋人に別れを告げられた後、現在に至るまで、ネイサンはコーネリアスと同じように浮き名を流していた。二人ともベッドを共にする相手は、後腐れのないように慎重に選んでいたが、ネイサンはどこか投げやりになっているように、コーネリアスには思えた。

言葉にすることはないが、ネイサンは心に癒えない傷を負っている。

今でもその恋人を忘れられないのだろう。

ネイサンに纏わり付く噂の方には、まだ成す術があった。

噂は様々だった。ウィリアムを殺したのは、やはりネイサンだとか、実はレディ・ジェサミンに毒を飲ませたのはネイサンだとか。そういった陰口を叩く連中は、父親譲りの眼光をもって睨み付ければ良かった。

コーネリアスが瞳に警告と怒りを込めて相手を睨むと、肩や背の方から黒く渦巻く怒気が発散される。目には見えないが、それは確実に相手に届いた。

その様子を目撃した者は、視線の先に居る人々を憐れみつつも馬鹿なことをと嘲笑し、視線を受けた人々は蛇に睨まれたカエルのようにすくみ上がり、口を閉ざした。

それを見る度にネイサンは笑った。

「言わせておいて構わないのに。」

「馬鹿を言うな。放っておけるか。」

自分の為に、自分の代わりに、髪を逆立てる勢いで激怒する友。

ネイサンはいつも面白そうに笑った。

今となっては、放っておいた方が良かったのではないかとコーネリアスは少々後悔している。自分が睨んだから——本人は、そんな

にも怒気を発していることに気付いていなかった――あの噂はいつまでも色褪せずに残っているのではあるまいか、と。とはいえ、数年が経って噂もかなり下火になった。それに、友を侮辱されて決闘を挑まずにいる為には、せめて相手を睨み付けるくらいしなくては、コーネリアスの気持ち収まらなかった。

ネイサン本人が反論するのは良くない。余計に好奇心を煽る可能性が高いからだ。

……僕が余計なことをして、ネイサンには迷惑だったかも知れないけれど。

心ない噂にはそうやって立ち向かっていた。しかし、浮き名を流し続けるネイサンが、女嫌いと言われるようになった経緯には、コーネリアスはどうすることもできない。いや、それ以上の助けはネイサン自身が望んでいなかった。それに、同じように身を固めるつもりのない自分に何が言えよう？ 二人は今や、『社交界一の色男』の名と共に『社交界一のプレイボーイ』の名を欲しいままにしていた。

ネイサンは、あの日のことを誰にも語ろうとしなかった。

しかしネイサンは自覚していた。

あの三日間、家族さえ彼の無実を本当には信じておらず、最愛の恋人にとんでもない言葉で別れを告げられた絶望の三日間が、心からの信頼を寄せてくれた友によって断ち切られ、その後も救われ続けている。

ネイサンはミス・アラベラにウィリアムの指輪を手渡すつもりは無かった。少なくとも直接には。

彼女が全てを知ったのは正確にはいつだったか、それは解らないが、真実を知ってから、濡れ衣を着せられたネイサンを捨て置いた為に、見たくなかった家族や恋人の本性を見てしまった。それに対する怒りがあった。

けれどその怒りは、隣に立つコーネリアスと、突如浮かんできた

ウィリアムの面影に、いつの間にか同情に変えられてしまった。自分の家族の有罪を、ましてやたった一人の兄が最愛の恋人を殺したという事実を、暴露しようという勇氣だけでも、ネイサンは彼女を許せる気がしたのだった。

また、ネイサンはあの日、ウィリアムと一緒に居なかったことで自分を責めていた。もしボーモント男爵家まで付き添って行ったなら。結局は何も変わらなかったかも知れないが、もしかすると何かが変わったかも知れない。もし若い男が二人だと知ったら、ボーモント男爵は向こう見ずにも飛び出してきたりはしなかっただろうし、レディ・ジェサミンも、過去にベッドを温めた男性を前にすれば、そのプライドからあっさり結婚を許したかも知れない。後悔せずには居られなかった。

そしてネイサンが自分を責めていることにも、コーネリアスは氣付いていた。きっと彼自身も、ネイサンと同じように自分を責めていたからだろう。もし三人一緒に居れば。もしあの時、故郷に帰らなかったら。もし……。

実現しなかった『もし』をいくら並べても不毛なのは解っていた。ウィリアムの生死に、自分がそれだけ影響を与えられる存在だと思いたいのかと、自身を嘲笑ったこともある。しかし、それでも何かができたのではないかという想いが心を苛んだ。

コーネリアスとネイサンとウィリアム、その三角形はウィリアムを失った空間を残したまま、形を変えることは無い。彼らの友情も、変わることなく存在していた。それは彼らにとって紛れもなく、一生分の宝物の一つだった。

セシーリアに手紙で親友の死を伝えることが出来たのは、ウィリアムの死からかなりの時間が経過した後だった。普段は二週間程待てば必ず返事の手紙が届いたが、その手紙に対する返事は、三週間

経っても返ってこなかった。

手紙の代わりにセシリア自身が、コーネリアスの祖母レディ・イザベラと共に、コーネリアスを訪ねてはるばるロンドンまでやってきたのは、手紙を出して四週間と三日、経った頃だった。

## 7 (後書き)

ずいぶん長くかかった第三章がようやく終わりました。  
次の更新は第四章になります。  
やっとやっとセシリアが出てきます。

コーネリアスが壁にかけられた絵を見ながら、物思いに耽っていることは、コーネリアスの育ての母と言える乳母・ポリーにはお見通しだった。

きっと、亡くなられたウィリアムさまを思い出していらっしやるのだろう。

ポリーは、コーネリアスの表情を読もうと努めながら、何度かこの屋敷を訪れたコーネリアスの友人を思い浮かべる。コーネリアスが連れてきた4人の友人たちは、それぞれ個性が強く、どうやってこの組み合わせになったのかと思うほどだったが、互いに強い友情で結ばれていることが見て取れた。将来有望な少年たちを友人に持つ「コニー坊ちゃん」を自慢に思っただけだ。

ご友人をセシーリアさまに会わせないようにするご努力は、とても涙ぐましかったわ。

ポリーは思わず綻びそうになる口元を、意志の力で抑えた。

コニー坊ちゃんのご努力は半分ほどしかうまくいっていなかったけれど。

コーネリアスの努力とは裏腹に、セシーリアはどうしてもコーネリアスの友人たちに会いたいようだった。手紙で知った人物が隣の屋敷にいるのなら、実物に会いたいということだったのかも知れないが、ポリーの目には、「好きな人のことなら全て知りたい」乙女心に映っていた。

だってうちのコニー坊ちゃんの傍にいて、恋に落ちない女性なんているわけがありませんからね。

親ばかりと並んで「乳母ばかり」という言葉があるのかは知らないが、ポリーは正にそれだった。

小さな頃から、コニー坊ちゃんはセシーリアさまに夢中だった。

そんなことは、乳母でなくてもコニー坊ちゃんを傍で見たいればすぐに判る。ポリー自身は乳母としての自分の目が、他の人々よりも優れているからだと言張するだろうが。

彼女から届いた手紙を手渡すときの、ご褒美でも貰ったときのような晴れやかな表情は、いつもポリーの心に暖かい喜びを灯したものだ。

思い出しながらコーネリアスを見やると、ぼうつと一枚の絵を見つめているのに気付いた。その視線を追って、壁に並ぶ絵を見やり、ポリーはとうとう堪えきれずに微笑んだ。コーネリアスが今、見つめているのは、16歳のセシーリアの肖像画だった。

コーネリアスが見つめているセシーリアの肖像画は、他のものより少し大きい。これは画家が訪れた際、フェザーランド卿が家族の肖像画を注文した時に描かれた、習作の一つである。淡くざっくりとした筆致で色が付けられている。その絵のセシーリアは、花籠を膝に置いて椅子に腰掛けていた。ふわりと解けていくような、どこか母性を感じさせる微笑みを浮かべている彼女は、ポリーの目には、とても可憐に映っていた。

額装されてはいたものの、飾る場所を探したままフェザーランド家の書斎に重ねられていたこの絵を、コーネリアスの祖母、レディ・イザベラが是非にと貰い受けたそうだ。それがこの部屋に飾られていることは、コーネリアスも知っていた筈だが、改めて心を奪われているらしい。

さっさと結婚してしまえば良いのに。

そんなことを思いながら、並ぶ絵を見渡したポリーは、たくさんの絵の中に、ポリーと夫のザックが二人で話しているところを描いた絵を見つけて、コニー坊ちゃんを抱き締めてキスしたい気持ちになった。

そんなポリーに気付かないほど、コーネリアスはセシーリアの肖像画に目を奪われていた。その表情に見覚えがあった。ちょうど、



ウィリアムが亡くなったという手紙を送った後のことだ。

その日、早朝に到着したロンドンの屋敷で、執事に出迎えられたレディ・イザベラとセシーリアは、コーネリアスの不在に落胆した。勿論その頃、コーネリアスは常にネイサンと行動を共にしていたし、まさか連絡もなく祖母とセシーリアが訪ねてくるなどとは微塵も思っていなかった。二人を迎えられなかったとしても、それは仕方のないことだと言える。

さて、孫息子と、その幼馴染みである少女の結婚を夢見るレディ・イザベラは、早くも画策を巡らせていた。

まずはコーネリアスが帰宅した時に、セシーリア一人に迎えさせること。これは思いの外簡単だとレディ・イザベラは、くすりと笑んだ。もとより、コーネリアスの希望により必要最低限の使用人しか置いていないロンドンの屋敷である。メイドを何人か連れて買い物にでも出るか、急な頭痛を訴えて部屋へ引き取ってしまえば、後は信頼できる執事のこと、セシーリアを殿方と二人きりにしたとて、彼女の名誉は傷つかないだろう。

レディ・イザベラは、今回の『訪問』を喜んでいた。詳しい出来事は聞いていない。聞いているのはただ、寄宿学校時代の休暇の際、何度か見かけたことのある孫の友人が亡くなったということだけ。

しかし、セシーリアの動揺振りは凄まじかった。「どうしても心配だから、おばあさまが彼を訪ねては下さいますか」と、彼女が手紙を書いてよこした時に、よほどのことが起きたのだと、初めて認識できたくらいだ。彼女の手紙からは、いつも丁寧なセシーリアらしくないところが多く、混乱し動揺していることが手に取るように解った。

レディ・イザベラは、一度は「自分が行くから安心するように」

という手紙を彼女に送っていた。そして、ロンドンまでの旅行の準備をしている間に、ふとコーネリアスは自分が行くよりも、セシリアが行く方が慰められるのではないかと、半ば希望を込めて思いついたのだった。とはいえ、うら若い乙女を付き添いもなくロンドンまで、しかも男性が一人で滞在する屋敷に行かせるよりは、当然自分が一緒の方が、と、連れだって訪ねてきたのである。

レディ・イザベラは大いなる期待を胸に、上機嫌で支度を調えていった。

## 1（後書き）

ちよつと大人になったセシーリアが登場です。

画面の前で、にやにやしていただけのような文章にすることを目標に……

……あまり大きな口を叩くのはやめます。はい。頑張ります！

ということで、今日の更新はここまでです。

日が真上にくる頃、コーネリアスはロンドンの屋敷の門をくぐった。レディ・イザベラは何も言わなかったが、屋敷の執事の命により、屋敷の従僕がコーネリアスに伝言を届けたのだ。有能なこの屋敷の執事には、コーネリアスがどこで何をしているか、おおよその検討はついたわけである。

祖母がロンドンを訪れたと聞いて屋敷に戻ったコーネリアスは、思いがけない人物に出迎えられることになる。もちろん、レディ・イザベラが用意したとおりのシチュエーションで。

執事が「応接間にてお待ちです」と言うのを聞いて、コーネリアスは何の疑いもなく応接間に向かった。祖母がロンドンまで出てくるのは珍しいが、そこは気まぐれな祖母のこと、今度はどんなことが起こるのかと、半ば呆れ、半ば楽しみにしながらコーネリアスは祖母の顔を思い浮かべた。そのまま家族の親しさで、ノックもなしに応接間のドアを開ける。

「お久しぶりです——」

部屋の中の人影を見た瞬間、言いかけた言葉が舌の上で渴いていくのを感じた。

窓辺に立つ、小花模様が入った翡翠色のドレスを身にまとった貴婦人は祖母ではない。陽光に照らされてほんのり赤く輝く淡い金色の髪を、流行の髪型に結い上げた女性。後れ毛を煌めかせながら、まるで金粉でも舞わせているように、こちらを振り向く。

目が合った瞬間、コーネリアスは自分が捕らわれたことに気付いた。正確には、既に捕らわれていたことに気付いたのである。

初めて彼女に会った時と同じように、コーネリアスの視界には彼女の瞳しかなかった。不思議なブルーとグリーンの瞳が、背後からの陽光を反射して、逆光の中、宝石のように小さな光をちりばめて

いた。心が脈打つ。全ての思考を奪われたような気がした。

頭は完全に真っ白だったが、まるで思考から沸き立ってきたかのように、唇から彼女の名前がこぼれた。

「セシーリア」

呼ばれた女性の方も、思考を吸い取られたような表情でコーネリアスを見つめていたが、その言葉でびくりと震え、ふっと目を伏せた。

繋がった視線が断ち切られたその瞬間、コーネリアスに理性が戻ってきた。ドアを開けた姿勢のまま、凍り付いていた自分に気付く。なんだか酷く間抜けになったような気がしていた。ドアを開けたまま、挨拶もなくぽかんと幼馴染みに見惚れているなど。

ドアを閉めて、歓迎の笑顔を作る。

「セシーリアじゃないか！ いつぶりだろう！」

幼い頃のように抱き締めてしまわないように気をつけながら、彼女に近づく。その言葉に彼女は幾分かほっとしたようにコーネリアスを見上げ、笑顔を確かめるように見つめた後、満面の笑みを浮かべた。

歓迎されていることを感じ取ったのだろう。その笑顔にコーネリアスはまた思考の全てを持って行かれそうになったが、実際に彼の思考を奪い去ったのは、セシーリアの次の行動だった。

「コーネリアス！」

彼女は朗らかに彼の名を呼び、一気に距離を縮めると、幼い頃と同じように、近づいてくる彼に抱きついた。そのままぎゅっとしがみつかれる。反射的に腕を回しながら、コーネリアスは自分が何か分からない大きな波にさらわれていくような感覚を味わった。

触れているところ全てで彼女を確かめているような感覚と、このまま放したくないという感覚が嵐のように吹き荒れた後、彼が恐れている感覚が訪れた。

慌てて彼女から身をはがす。不自然に見えないように、笑顔を崩

さないように。自分に言い聞かせながらセシーリアの顔を確かめる。  
「相変わらずお転婆娘だな、まつげちゃん。」

「貴方ほど向こう見ずではなくてよ、ミスター・コニー。」

二人はくすくす笑いながら、軽口を叩いた。

「おばあさまは？」

「ついさっき、お買い物から戻っていらしたんだけど、頭痛がするからと寝室に行かれたの。」

「一人で僕を待っていたのかい？」

コーネリアスは心の中で祖母を罵った。

いくら幼馴染とはいえ、若い男女を二人きりにするのは危ないだろう。……主にセシーリアが。

身をはがすときに、彼女の両肩に置いて、そのまま引けないでいる自分の両手をちらりと見やりながら、苦々しく思う。

「ええ。」

身の内に感情の嵐を抱えるコーネリアスを、セシーリアは気遣わしげに見つめていた。

自分の表情を探られているような気がして、彼女から遠ざけておきたい感情を見つけられてしまうような恐怖を感じて、コーネリアスはふと目を逸らした。

「仕方のない付添役だな。」

苦笑しながら言う。彼女の両肩に置いた掌が熱い。そろそろこの手を引かなければ。名残惜しさを抑えて手を引こうとしたとき、セシーリアの両手が自分の両頬に触れるのを感じて飛び上がった。

「セシーリア?!」

セシーリアの両手はコーネリアスの顔を自分の方に向けて、表情の中に何かを探しているようだった。年甲斐もなく顔が熱くなっているのを感じる。これが社交界で恐れられている色男だろうか。自分よりもかなり年下の幼馴染みが頬に触れただけで赤面しているなんて。

当のセシーリアは、赤面することも緊張することもなく、またコ

ーネリアスの反応に気付いてもいなさそうに、探るような視線を這わせていた。

しばらくそのままコーネリアスの頬を押さえ、セシーリアは何かを探しているようだった。そこに何を見つけたのかは分からないが、何かに納得したように、彼女は至近距離のまま、ふわりと微笑んだ。

彼は大輪の花が、ゆっくりと目の前で開いていくのを見た。

形容しがたい感情の波が、優しく広がっていくのを感じる。その微笑みは、今まで見たどんな魅力的な微笑みも霞んでしまうような、圧倒的な衝撃を伴ってコーネリアスの胸に届いた。

母性さえ感じさせる、包み込まれるような微笑みは、その優しさに反比例する激しさで、コーネリアスの心臓を掴む。握りつぶされるかと思うほど、心臓がギリギリと痛んだ。

心というものはやはり、胸にあるものなのか――……。

ぼんやりとそんなことを思う。

自分がどんな表情をしているのかは解らなかったが、痛む心を抱えながらも、セシーリアの微笑みから目を離すことができない。自分が動いているのか、彼女が動いているのかは解らないが、もとより至近距離だった二人の距離が、更に近づいているようだ。反射的に、コーネリアスは少しだけ首を傾けた。

## 2 (後書き)

必殺☆寸止めです。

こんなところで切ってしまつてごめんなさい＜＜。

続きは今夜か明日、挙げられると思います。



あと少し動けば唇が重なる……。

互いの吐息さえ感じられる距離で、コーネリアスは思った。視界いっぱいには彼女の瞳の色を映し、表情さえ読めない。

もう、このまま——……。

そんな気持ちになった直後、心の中に言葉が浮かぶ。

——「僕は化け物だ」——……。

今まで彼の心臓を掴んでいたものとは別の、何かもっと残酷な力強いものが心臓を鷲づかみ、爪を立てた。

コーネリアスは意を決して、セシーリアの目から自分の視線をはぎ取り、目を閉じて彼女の額に口付けを落とした。

コーネリアスが唇になめらかな肌を感じた瞬間、彼女は火傷したように手を放し、2、3歩後退って口をぱくぱくさせながら、みるみる赤くなった。コーネリアスは、彼女の不思議な目が自分の秘密を全て見通してしまったのではないかという恐怖を覚えた。

「ごめんなさい！」

口ごもりながら、耳まで赤くして彼女が謝罪する。

どうやら今初めて、彼女は自分がコーネリアスの顔を捕まえてまじまじと見つめていたことに気付いたということらしい。コーネリアスは緊張が解けるのを感じながらも、彼女の手が無くなった頬が寒くなったような気がしていた。

「襲われるのかと思ったよ。まっげちゃん、こんなに積極的な女性に育っているとは……」

頬を染めて、さも怖かったと言うように胸に手を当てるコーネリ

アスを見て、セシーリアは湯気が出そうなほど赤くなった。

「違うの！ そんなことじゃ……」

「確実に、僕の唇は奪われるんだと思ったよ」

一生懸命弁明しようとする彼女を遮って、コーネリアスは更に言葉を重ねる。自分の罪には、今は目を瞑ることにする。

「違うわよ！ 今のは、唇を奪おうとしたとか、頭をもごうとしたとか、そういうことではなくて、貴方の頬に何かが付いているのを見つけてそれで……」

彼女がちぐはぐな言葉を並べ立てている間、コーネリアスは自分で言った言葉に苦しめられていた。

……奪ってしまえば良かった、柔らかそうなあの珊瑚色の唇を。

思った瞬間、先ほど押さえ込んだ衝動が一気にわき起こるのを感じた。

喉が渴く。息ができないほどに。

喉元を掻きむしりたくなるような衝動を抑えるために、彼女から距離をとる必要がある。……今すぐに。

コーネリアスは、まだ耳まで真っ赤に染まっている幼馴染みの頭を撫でて微笑みかけ、「祖母のご機嫌を伺うことにするよ」と告げた。彼女はそれで納得したようだ。

部屋を出てドアを閉めるコーネリアスの耳に、彼女が安心したように呟く独り言が聞こえた。

「元氣そうで良かったわ。」

瞬間、コーネリアスは全身が脈打つような感覚を味わった。

閉めたドアにもたれたまま、唇を噛む。衝動を抑え込むために大きく息を継ぎ、肩で息をする。いつもならこれで押さえ込める衝動が、今日はうまくいかない。自分の皮膚の下で獣が暴れているような気がした。

早足で近くの書斎に入る。誰もいないことを確認し、ソファの背

もたれに手をついて深呼吸を繰り返す。別のことを考える。彼女のぬくもりや瞳、唇以外のことを。「元氣そうで良かった」という台詞が表す意味以外のことを。自分に言い聞かせるが、喉はどんどん渴いていき、思考は乱れるばかりである。

至近距離で優しく微笑んだセシーリアが視界から消えない。

「くそっ！」

低い声で悪態をつき、コーネリアスは軽く握った自分の拳を口元に持って行った。これをするのは久しぶりだ。今回もこれで押さえられれば良いのだが。

カリッと小さく音をたて、とがった犬歯で人差し指の付け根のあたりを傷つける。そこから溢れる血液を啜る。何とも言えない血の味が口内に広がる。

衝動が落ち着くまで彼はそのまま自分の血を味わった。拳を唇から放す頃には、傷は綺麗になくなっていた。何とも言えない虚無感が残る。自分の血で衝動を抑えたときには、いつも襲われる感覚だ。お前は何をしているのかと、戻ってきた理性が問いかける。けれどもいつもの渴きが、これでは足りないと言っている。

数日前にベッドを共にした女性から、吸った筈なのに。

まだ抑えていられる筈の欲求が、セシーリアを前にすると抑えられない。

セシーリアは「元氣そうで良かった」と言った。

それはつまり、彼女は自分の手紙を見て、心配して駆けつけてきたということだ。ウィリアムやネイサンのことを書いたからだろう。なるべく淡々と事実だけを書いたつもりだった。淡々と書けるようになるまで時間を置いてから書いたつもりだった。彼女からの慰めの言葉を期待していたのは確かだが、まさかロンドンまで来てくれるとは思わなかった。いや、心のどこかでは期待していたのかも知れない。

浅はかな自分は、彼女の傍に居られないと分かっているもお、

やはり彼女に会いたかったのだ。

今夜は渴きを癒すために娼館へ行かなければならぬだろう。このままでは文字通りセシリアを襲ってしまう。理性が無くなってしまった自分を想像するのが怖かった。

晚餐は非常に和やかな空気だった。コーネリアスは祖母や幼馴染みに、それは細やかな気遣いを見せた。孫に甘いとはいえ、礼儀にはそれなりに厳しいレディ・イザベラが満足げに微笑む程度には良いホスト役だった。

そのレディ・イザベラは、自分の計画通りに、コーネリアスがセシリアに迎えられたのを知っている。コーネリアスが赤い顔で応接間から出てきたのを執事から聞いていたし、お茶の時間に会いに来たセシリアの表情を、注意深く見ていたからである。

お茶の時間のセシリアは、そこにいるだけでレディ・イザベラを楽しませた。頬を上気させ、夢見るような表情を浮かべたと思ったら、爆発音でもしそうなくらい突然に、耳まで赤く染めておろしていたりする。レディ・イザベラは優雅にお茶を飲みながら、表情は一瞬たりとも変えなかったが、微笑ましくセシリアを観察していた。

晚餐の席でも、平静を装っているつもりらしいセシリアは、コーネリアスの視線が彼女に向く度、竦み上がっていた。もの言いたげなコーネリアスの笑顔に、言葉をかけられたわけではないのに、セシリアは耳まで赤くして、視線を逸らしていた。

孫と何かあったらしい。

喜びの雄叫びをあげたいような気分になったが、心の中で歓声をあげるに留めたレディ・イザベラは、これからの期待と共に、ゆっくりとデザートを堪能したのだった。

### 3 (後書き)

肩すかしでごめんなさい><

セシーリアは決して頭の回転が鈍い女の子ではない。寧ろ周囲の空気に敏感で、人の気持ちの動きを察知することに関しては、才女と名高いレディ・イザベラさえ舌を巻くほどだった。

セシーリアが10歳を少し過ぎた頃、フェザーランド卿を若い男性が訪ねてきたことがある。男性はフェザーランド卿の異母弟を名乗り、誠実そうな表情と柔らかい物腰で、上の兄との関係に「行き詰まっている義兄」に協力を申し出た。

フェザーランド卿はフェザーランド伯爵家の出身である。彼は次男であったが、騎士として従事していた間に、その誠実な人柄を買われ、病弱な兄に替わってフェザーランド伯爵が担うべきロンドンでの役職に就いていたことがある。その時の功績により、フェザーランド卿はカーステン男爵位と共に現在の領地を得たのである。

しかし、フェザーランド伯爵は弟の成功を良くは思わなかったらしい。その頃からフェザーランド兄弟の仲は疎遠になっていき、セシーリアがフェザーランドの名を持つ親戚にあまり良い印象を残さないままに至る。父は寂しそうだったが、どこかで諦めているようにも見えた。兄との仲違いが自分の得た称号の為だと考えたフェザーランド卿は、必要な時以外にカーステン男爵を名乗ることは控えるようになったのだった。

フェザーランド伯爵兄弟はそんな状況にあった。幼いセシーリアは、その若者とお茶の時間を過ごし、退室の挨拶の際に、不思議そうな顔でこう尋ねた。

「あなたはとうさまがきらいなのに、どうしてすきだというふりをするの？」

レディ・イザベラは、その時の話を自慢げにするフェザーランド

卿の顔を思い出していた。まるで「うちの娘は全知全能だ」と言い  
たげに、娘の手柄を自慢するフェザーランド卿を、レディ・イザベ  
ラは微笑ましく見ていたものだった。

異母弟を名乗った若者は、確かにフェザーランド家の流れを汲ん  
でいた。先代フェザーランド伯爵の弟の庶子という、少々回りくど  
い流れではあったが。事実を知ったフェザーランド卿が差し伸べた  
援助の手は、彼の病気の母親には間に合わなかったが、同じ病気の  
妹には間に合ったらしい。若者はフェザーランド伯爵家に乗り込む  
のは諦めたようで、今ではフェザーランド伯爵家の領地内で管理人  
を任されるまでになったという。若者がどういう復讐計画を立てて  
いたかは、今となっては分からないが、結果的に彼の行動は、フェ  
ザーランド兄弟を仲直りさせ、団結させて叔父の不名誉を濯ぐだけ  
の効果をもたらしたのである。

レディ・イザベラは小さなセシーリアに、若者が父を嫌いだと思  
った理由を尋ねたことがある。セシーリアは尋ねられたことの方が  
不思議だという顔で、初めて挨拶したときに、彼はセシーリアの顔  
ではなく着ている服を見たことや、通された応接間の家具や装飾品、  
出されたお茶のカップを見、それなのに褒める言葉も出さず、苦々  
しげに顔を歪めたことを挙げた。

「あたしのことは、そんなにきらいじゃなかったみたいだけど、く  
やしそうだったの。」

若者は病気の妹を想い、セシーリアの恵まれた環境を憎く思った  
のだろう。

レディ・イザベラは、幼い少女の「見る目」にも驚いたが、すら  
すらと理由を挙げる聡明さにも驚いたものだ。

そんなセシーリアが、コーネリアスとセシーリアを二人で会わせ  
るという画策を巡らせるレディ・イザベラに気付かなかったのは、  
彼女の注意が全てコーネリアスに向いていたからに他ならない。

コーネリアスがネイサンと連れだって出かけられる程度には元氣

なのだということは、彼女にとって大いなる慰めだったが、それでも同じ町にいる今、自分の目でコーネリアスを確認しなければ、気が収まらなかった。

少なくとも、ネイサンという、同じ痛みを分かち合える仲間と居るならば、自分と居るよりも大きな慰めを得られているだろうと思う。

だが心配だった。ただひたすらに心配だった。

セシーリアはネイサンのことも、ウィリアムのことも、ジョージやサムのことまでも含め、学校生活のことについて、コーネリアスの家族よりも詳しく知っていた。勿論、年下の幼気な幼馴染みに教えることが出来る、とコーネリアスが判断した話に限られはするのだが。彼らはそれだけ長い時間、互いに手紙を書いていた。

だからコーネリアスはセシーリアの憧れの叔母のことも知っていたし、その叔母の屋敷が如何に「素敵」であるかも知っていたし、そこに自分のベッドを置きたいくらい「感動的な」庭があることも知っていた。

他の少女たちと一緒に、叔母の屋敷に滞在して行儀作法を学ぶ日々における、何気ない出来事を、ユーモアたっぷりに、夢見る乙女らしい文章で伝えてくれるセシーリアの手紙は、コーネリアスの毎日を明るくしていた。

互いに知っていることが多いからこそ、セシーリアはコーネリアスが心配だった。言葉少なに、ウィリアムを亡くしたこと、ネイサンが無実の罪で一度は囚われたこと、ウィリアムが死ぬに至った経緯を綴った手紙は、多くを語っていないからこそ、悲痛な想いが透けて見えた。

慰めが必要かどうかは解らない。もし必要だったとして、自分がその慰めを与えられるかさえ解らない。それでも会って彼の無事を確かめたかった。

……コーネリアスは悲しむのが下手だから。



コーネリアスは、ある時を境に、天真爛漫な少年ではなくなった。幼いながらに、セシーリアはコーネリアスが変わったことに気付いていた。何かに押しつぶされそうになっている彼に気付いていた。その時から、コーネリアスは自分に対してさえ、一定の距離を置くようになった。

冷たくなったとか、セシーリアを気遣ってくれなくなったとか、そういうことではなく、何かを押し殺しているように感じる。初めて出会ったときから注意深く見つめてきた幼馴染みのことだ。セシーリアは、コーネリアスが思っているよりも遙かに深く、彼のことを理解していた。

#### 4 (後書き)

うだうだ続きますごめんなさいT△T

## 5 (前書き)

後半にヒロイン以外とのR指定表現が含まれます。  
苦手な方はご注意ください。

レディ・イザベラは、ロンドンに着いた日の夜、寝室に引き取ると、コーネリアスの一挙手一投足に顔を赤くしたり青くしたり、忙しく顔色を変えているセシーリアを思い浮かべ、ゆったりと微笑んだ。

愛らしい少女は、間違いなく孫息子のことを浅からず想っている。レディ・イザベラは偉大な女性だったが、祖母としての彼女は、孫息子の幸せが第一の関心事であり、孫息子の親友が亡くなって欠けてしまった心の場所を、この少女こそ、と見込んだセシーリアが埋めてくれることを期待していた。

セシーリアは、社交界に溢れる着飾ることにしか興味のないお馬鹿さんとは違う。幼い頃から親しく接してきた、孫娘とも言える愛らしい少女である。機知に富み、ユーモアに溢れ、優しさに満ちている。多少無我夢中になってとんでもないことをしでかす傾向にはあるが、それも若さ故。今回だって、セシーリアが一人でコーネリアスを訪ねる等という向こう見ずな行動には出なかった。

これが数年前なら……セシーリアは間違いなく一人でコーネリアスに会いに来ただろう。

レディ・イザベラは苦笑した。愛すべき少女は、幼いころからコーネリアスと同じように庭を走り回ったお転婆娘だったのだから。

それが、自分が飛んできたのを堪えて「おばあさまが……」と手紙を寄越す程、淑女として成長している。孫息子が何故、この少女との婚約を避けているのか、レディ・イザベラには理解できなかった。まだ彼女が若いとはいえ、婚約には問題にならない。もっと幼くても、婚約している少女はいる。

他に誰か居るのか、それともセシーリアを妹のような存在として認識しているのか……。

ロンドンの屋敷に滞在している間、レディ・イザベラは密かにコ

ーネリアスを観察するつもりだった。孫息子がセシーリアをどう思っているのかを見極めなければならぬ。憎からず思っているという確信が持てれば、背中を押してやるつもりでさえいた。

大いなる決意を胸に、レディ・イザベラは床についた。

コーネリアスは、セシーリアの唇を感じていた。

夜のバルコニーに二人きり。月明かりにほのかな温もりを感じる気がした。

セシーリアが向ける微笑みに耐えきれなくなったコーネリアスは、彼女の首に左手を添え、右手で彼女のあごを上向けると、そのまま奪うように唇を重ねた。

少し荒っぽい口付けに、セシーリアは驚いたようだが、暫くすると首の後ろに両手が回されるのを感じた。首とあごに添えていた両手を、セシーリアの背に回す。全身を自分に預けるように、口付けに応える彼女に愛しさが募る。

……このまま抱きつぶしてしまいたい。

口付けを深め、背筋に震えが走った瞬間、コーネリアスは一気に渴きに飲み込まれた。

大丈夫だ、……これくらい抑えられる。

妙な自信のもとに、そのまま、コーネリアスはただ、ふわふわと快感の波に漂った。

不意に波が途切れ、目を開ける。自分の幸福に酔いながら、彼女の名を呼ぶ。

まだ目を閉じたままの彼女は返事をしなかった。

彼女も幸福に酔っているのだろうか。目を開けると、夢から醒めるように、この幸せが褪せてしまうような気がするから。

それなら、もうしばらく、そっとしておこうか……。

コーネリアスがそう思ったとき、首に回されていた筈の彼女の腕

が、するりと落ちた。

眠ってしまったのか？

腕の中のセシーリアは身動き一つしない。言い知れない恐怖が背骨を撫でていく。

セシーリア？

呼びかけながら、彼女の頬を撫でる。その感触は、棺の中のウィリアムに重なった。……冷たい。コーネリアスは自分の口内に血の味を見つけた。震える手でセシーリアの首筋をあらわにすると、そこには、傷もないのに血液の後が一筋、残っていた。

声にならない声を上げて、コーネリアスは飛び起きた。

体中が恐怖に脈打ち、世界に希望はひとつも見いだせない。荒い呼吸を繰り返し、頬に流れる雫をぬぐう。

「――夢だ……。」

現実を確かめるように、その言葉を繰り返す。

僕は理性を失っていない。セシーリアを食らい尽くしてなどない。

心臓が早鐘を打つのが分かる。暗闇の中、明るいものは何も見えないような気がしていた。

自分の血で渴きを抑えたことを思い出し、コーネリアスは更に恐怖を重ねた。セシーリアの存在は、コーネリアスの渴きを煽る。このまま彼女の傍にいれば、理性が飛んでしまうのではないか。彼女の生命維持に必要な量を超えて、吸血してしまうのではないか。

コーネリアスの手は冷たくなっていたが、体は汗でぐっしり濡れていた。

考える余裕が戻ってきたコーネリアスは、時間を確認し、予定通り貴族階級を主な顧客とする娼館を訪れることにした。

晚餐の後、何となく屋敷を出るタイミングを失って、そのままベツドに入っただが、こんな夢を見た以上、自分の理性に自信など

持てなかった。

夜会で出会った女性とベッドを共にすることもあるが、後腐れのない相手を選ぶ余裕がない時には、娼館を利用した。何処の誰と名乗る必要もないし、自分の都合の良いように注文が出来る。抑えきれない吸血衝動に、ここほど便利なところはないだろう。目深に被った帽子で顔を隠していても、料金さえしっかり払えば咎められることもない。

コーネリアスの注文はいつも、暗い部屋とブロンド、それから血色が良いこと。実際には女性の顔も見ない。部屋の灯りを落とすので、髪の色もしっかりと見えるわけではない。けれど、掌にとった髪が金髪であると思った。……赤く光る淡い金色の髪だと。

寄宿学校時代は、吸血衝動は娼館で満たすしかなかった。そのおかげで、愛撫に隠して吸血することが得意になった。吸いやすい場所というのも、本能的に解るらしい。愛撫の合間に、吸い寄せられるように、女性の首筋に唇を寄せ、歯を立てる。

傷を付けて吸血しているのだが、これまで苦痛の表情を見たことはない。寧ろ吸血された女性は悦びの声をあげ、互いの快感を促した。吸血後に唇を離すと、そこにはやはり傷も残っていない。

相手の女性がふくよかであることに安心し、いつもよりも少し量の多い血液を味わう。さすがに毎日、娼館へ通うわけにはいかない。そしてセシリアに対して沸き上がる渴きから、彼女を守らなければならぬ。

今日だけは少し多めに血液を吸わせて貰おう。自分が衝動に負けないように。

コーネリアスは祖母と幼馴染みのロンドン滞在に備えた。

## 5 (後書き)

R15タグに相応しく(?)書いていれば良いのですが……。  
……R18まではいかないと信じていますが、やりすぎteいたらごめんなさい><。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7554x/>

---

僕が望む全て

2011年11月17日03時29分発行